

麻生路郎・主宰

十一月號

防火班梯子の上よまの老さ

あ

Pensoj flugas trans la land-limon

川

物

の

証



|| 苦笑と哄笑で人生勉強 ||

★定價 八十錢 (送料) 六錢
海外注文は送料實費加算を乞ふ

麻生路郎著 新川柳評釋

★どのページから読んでよい。面白いから引づられて読む。讀み了つたら、川柳の味が判るといふ本である。

戸田孤蓬 著 題字・京大教授 本庄榮治郎博士

川柳 二千六百年史

序・麻生路郎
跋・宮本又次

★本誌十七卷一月號より七月號まで連載好評を博した川柳二千六百年史に、大増補して上梓!

定價 九拾錢
(送料) 六錢

川柳漫畫

累卵の遊び

麻生路郎著 柴谷柴舟畫

★特價 八十錢 (送料) 九錢

阪大 川柳會 編纂

ちんちん端

川柳旬集

麻生路郎序
★大阪帝國大學の中で生れた異色ある句集である。四六版二〇〇頁。
定價 壹圓 (送料) 六錢

川・雜・句・箋

★一冊 拾五錢
送料 三錢

藤村誠一著

序 麻生路郎
百田宗治 跋 吉川則比古
裝幀 田村孝之介

詩人複眼

定價 壹圓 (送料) 六錢

堺市出島海岸通二丁一八二一

發行所 不 朽 洞

★高鷲亞鈍が著者のペンネームだと云へば本誌讀者にはこの本が持つ魅力を想像することが出来るやう。

振替大阪三〇三九二番

時代の要求する

絹服地 ★ ス・フ生地 ★ 毛織物

事務服・ワイシャツ

國旗・風呂敷 其の他

日東サービス株式會社

大阪市東區北濱二丁目 ★ 電話北濱 〇六六三六番 (4)

不朽洞近詠

麻生路郎

★時事★

★大學、専門學校の卒業を半年以内短縮、國防直接要員に動員すべき臨時措置を發表。(十月十五日)

★第三次近衛内閣總辭職(十月十六日)

★東條内閣組織(十八日)

★昭和十七年の春を壽ぐ宮中歌御會始の御題を「連峯雲(れんぼうのくも)」と御決定。(十月二十二日)

★防空演習舉行(十月十二日)

★大阪府下の河豚販賣營業許可(九月二十日)

★防空演習舉行(十月十二日)

★昭和十七年の春を壽ぐ宮中歌御會始の御題を「連峯雲(れんぼうのくも)」と御決定。(十月二十二日)

第三次近衛内閣總辭職

陸軍大臣(再任) 東條 英機
海軍大臣 嶋田繁太郎
司法大臣(再任) 岩村 通世
文部大臣(再任) 橋田 邦彦
農林大臣(再任) 井野 碩哉
商工大臣 岸 信介
逓信大臣 寺島 健一
内務大臣(兼任) 東條 英機
農林大臣(兼任) 寺島 健一
大藏大臣 賀屋 興宣
拓務大臣(兼任) 東郷 茂徳

するだけはしたと荻外莊靜か

明日からは少し朝寝もされよかし

近衛前首相に贈る

東條内閣の誕生

ルーズヴェルトに贈る

會談へ日本刀がちらつかん

時局私観

氣兼ねてゐては打水さへ出來ず

越舟大人を悼む

三七日へああ松風の音すなり

芳一氏逝く

官舎の灯今はむなしくまたたくか

川柳雜誌 十一月號目次

表紙(協力一致) (句)八歩(寫)哲
川柳寫真 路郎・哲

時事 (一)

川銃後名句評釋 麻生 路郎 (二)

川柳想の人 安川久留美 (三)

武玉川四篇研究(四) 森本 塵山 (六)

愚談 小畑自有浪 (三)

燈下放談 路郎・丹路・某人 (四)

川解題と例句 麻生 路郎 (二)

ヒル街の雑音 後藤田凡生 (七)

國語川柳點に就て 石曾根民郎 (三)

赤い折靴 鈴木 九坡 (三)

川世界史(五) 戸田 孤篷 (三)

湯屋の出來事 大山 露斗 (三)

吟行地 奈良篤(九) 麻生 路郎 (四)

父は他人 大森風來子 (三)

白衣川柳慰問 山雨樓・久米雄・市多樓 (九)

七人句評 風來子・九坡・灯字・伯峯 (二)

川柳書架(七七) (一)

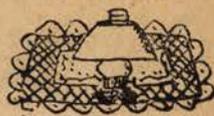
不朽洞近詠 麻生 路郎 (一)

近作柳柳 麻生路郎選 (八)

川舟近詠 麻生路郎選 (八)

各地柳壇 大島壽明選 (二)

社關係の人々(三六) 柳界展 望 (三)



川柳 題解と例句

—編 郎 路—

(19) 筆

★筆は支那が元祖で、毛筆は秦の蒙恬といふ將軍が創始したのでと云はれてゐる。それ以前は木筆であつた。

★わが國では應神天皇の朝に筆があつたと云はれてゐるが、筆と名づける程度のものであつたかどうかは疑問である。

★筆らしい筆は弘法大師が唐から傳へたのが始めてであらう。

★筆の古語は筆である。事を筆と書くやうになつたのは事、軸に竹を使用するやうになつたので、筆に竹を加へて筆としたのである。

代筆を頼むと筆を汚がり

孤兒院の一番安い筆を買ひ
幕千子 呂山

愧づかしい筆へ頭を下げに
煎舟

(20) 七厘

★七厘はこんろの類で、土製で方形である。

★火がおこり易いために、炭の價が僅かに七厘で物を煮ることが出来ることから、斯く呼ばれるやうになつたのである。

★七厘の名稱がいつころから起つたのか詳らかでない。明治時代の産物であらう。



川柳 後名句評釋

麻生路郎

聖殿へ死闘しつゝある人たちに、銃後の動きを句の評釋によつてお知らせすることにした。作者は何れも不朽洞會員である。

皇軍にすまぬと思ふ

湯があふれ

貴志子

女性らしい心づかひに胸をうたれる句である。戦線では一杯の水にさへこと欠いてゐると聞かされてゐるので、湯槽の湯があふれてさへ、しみ／＼となるのである。銃後を護る作者の敬虔な態度がこの一句にうかがへるではないか。

この句を一讀すると、御先祖よりも、こちらが先きにふき出してしまふ。墓参した時の實感であらうが、櫛の丸停、なんだか、矛盾を感じずにはゐられないやうな氣もする。皮肉な句である。

戦へる國に生れて二

十一

潮花

男だ。二十一だ。もう丸刈にした。ウズ／＼してゐる氣持がほとばしり出てゐる。

をなご共騒ぐな炭の無い位ひ

満潮

この意氣、この意氣。すべてはこの意氣である。この意氣さへあれば銃後は磐石の重きに比すべきである。表現の鋭いところが内容を飛躍させて餘りある句である。

英靈はいつちやさしい子であつた

貴志子

勇躍征途にいた子は臆て異境に散華し、無言の凱旋をした。

茶漬また愉し獨身工の意氣

史路

職域奉公の一念が燃えて、節約の出来るだけ節約をしてゐるさまが「茶漬また愉し」の齣に横溢してゐる。銃後の職場が斯うした青年の力によつて支へられてゐることは日本

てうなづくであらう。穿ちの句。

傷痕章コーヒ氣兼ね味になり

孤篷

斯うして、悠々とコーヒを飲んでゐられるのは戦傷白衣のお蔭だと思つと、傷痕章が眼に映ると同時に、コーヒが氣兼ね味になつたといふのである。作者の純情がよく出てゐる句である。

出征の留守姑も血が通ひ

貴志子

嫁から云へば夫の出征、姑から云へば愛息の出征である。俄然嫁と姑の牆壁がとれた。姑の心境が著しく變化した。作者はそれを見逃さなかつた。鋭い觀察である。

肥擔ぐ腰の力がある

形水

農家出身の兵に捧げた句だ。日本の兵は強い筈だ。底力がある。ガン張りがある。これも農業國日本の祖先の血が流れてゐるからだと作者は滿腹の信頼をこの一句によつてさげしてゐる。

歸還兵ふと臺所したくなり

史路

戦線で豚の料理や鶏の料理をした経験が、歸還してから、ちよい／＼首を擡げて、臺所へ立つと一寸料理がして見たくなるといふ歸還兵の心理を掴んだ句である。あんたはそんなことをせんかてよろしと女房にきめつけられ相な

兵一人送る玄關明け放ち 貴志子

サアいよ／＼出征だ。もう我が子であつて我が子ではない。お國へ捧げたからには大君の楯の一人だ。元氣よくやつて来いと、玄關を明け放つて送り出してゐるさまが髣髴として眼に浮ぶ句だ。

七厘へ裏の師匠は舞扇無煙
七厘がみんな出てゐる舟の
朝 萬の 的

(21) 本職

★本職とは(A)生活資料獲得の
ための職業であり(B)比較的永續
的な職業であること(C)一定の收
入を有すること(D)一人又は一世
帯に就いて職業が二種以上ある場
合に、主たる職業であること(E)
専ら従事する職業であること(F)
主として一身を委ねる職業である
こと(G)収入の最も多いものである
こと、以上の七項によつて副業
や内職と區別することが出来るで
あらう。

本職と思はず效丁十五年
萬よし
本職を知られてからはやつ
て來ず 泰平
本職を守り手堅う暮すなり 穂波子
智慧があり過ぎて本職棒に 銀砂子
振り

(22) 釋

★釋は天照大神の時に、天劍
賣命が天香山の天日薙を釋にされ
たのが始である。
★たすきは古くは手綱と書かれ
てゐる。衣篇に擧と書いて釋と讀
ませるのは日本での造字らしい。
★「ことばの泉」によると、勞
作する時に、袖を、二の腕に束ね
る紐とされてゐる。要するに釋は
布片の細い紐であるが、緋しごき
や繩を代用とすることもある。應
召された時は赤釋、徵用された時
には白釋を用ひる。

★萬葉集に「たまだすきかけね
ばくろししかたればつきてみま
くのほしき君かも」といふ歌がある
赤釋掛けて昨日の聲でなし
九 坡
釋きりと姑のお氣にいり
美奈子

情景が眼に浮んで來るのも面
白い。

會計は留守です二流

新聞社

某 人

二流新聞社の會計が、どん
な状態であるかと云ふことは
想像にまかせざるが、新聞社の
會計位勘定合うて錢足らずの
會計はあるまい。天下國家を
論じてゐても、社の懐ろは頗
ぶる貧弱そのものなのであ
る。いつ訪ねても會計は留守
であるのも滑稽である。尤も
そんな新聞社は最近統合問題
をいゝしほに退却してしまつ
たであらうが。

通達で社宅馬鈴薯植

系さゝれ

波夢造

社長の頭のいゝのにかか
とかなはない。それ鶏を飼
へ、それ馬鈴薯を植ゑろ。寸
尺の地も遊ばしておくとな
次ぎから次へと通達が出る。正
直に實行してゐたら、からだ
が幾つあつても足りない。

俺の手で此處までし

たぞ赤釋

恒 明

赤釋をかけた我が子の颯爽
たる姿を見て、男親は斯く叫
んだのである。こゝまでは俺
の手一つで育て、來たが、こ
れからは貴様の力だぞお國の

ために必ず役に立つてくれ
よ。と激励するのも親ごころ
だ。

休閑地買ふより高い

葱が出来

普 天

味はつて飲んで欲し
いと云ふお酒 滿 潮
水酒、金魚酒で一時騒いだ
思ひ出される。これは自分の
畑でないといふ
言葉もある。勞
多くして効少な
しといふ言葉も
ある。いくらう
つちやらかして
ある土地でも素
人が鋤を手にし
て俄百姓をした
ところで、それ
は餘りに高い汗
でしかない。そ
れよりは自分の
本職に、より專
念する方が國家
のためにも御奉
公になるのでは
あるまいか。



職 二つこつ花緒の切られ子もまじり (路 郎) カヲ福 井 哲

この句、そう
した方面への示
唆をふくむもの
として考へさゝ
れる句だ。

が、經濟警察の活躍で、いつ
しか酒らしい味にもどつたと
思つたのも束の間、家庭への
配給は皆無といふ状態となつ
た。たまゝ酒を手に入れた

もう笑ひますと北支
の父に書く 一 涙
父が出征のころには、まだ

おなかにゐたのである。男の
子だつたら何んと名づけよ。
女の子だつたら、そちらにま
かす、などといふ軍事便のや
りとりがあつて生れた赤ちや
んである。月日はみるゝ流
れてゆく。

切符制何時もの顔が
利かぬなり 水 虹
自由經濟時代が過去のもの
となつた。

とん／＼からの隣保制が
生れた。そして切符制が行は
れるやうになつた。すべてに
勝手が違つて來た。いつもの
顔が利かなくなつた。一列に
並らばされることになつた。
商人と顧客と主客顛倒の時
代が來た。穿ちの句である。

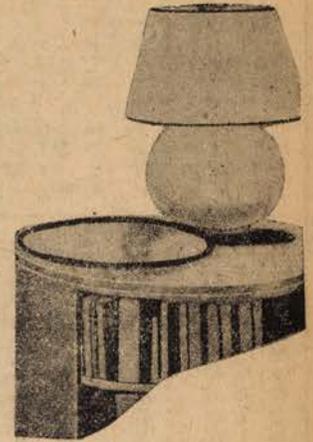
に問慰の士勇

柳誌柳書

を

部版出洞朽不・社誌雜柳川

談放下燈



王夜・人某・秋豆・路丹・郎路

★柳俳の差別を訊く人達のこと
 ★獨身時代の作家が何故永續せぬか
 ★作家の奥さんと川柳眼
 ★多忙で作れないといふ作家に

柳俳の差別を訊く人達のこと

某人〓近頃よく川柳と俳句とは、どう違ふかといふことを訊かれるんですが、その尋ね方といふものが、どうも俳句を知つてゐて川柳を理解しやうとか、川柳を知つてゐて俳句を知らうとしてゐるのではなくつて、たゞ單に川柳・俳句を概念的に知らうとするので、實物そのものにぶつかつてみたら、そんな質問をする必要もないのに、實物を全然見ないで尋ねるだけ尋ねる、そんな人がよく有るんですね。こんなのは近頃の全體的な風潮じやないですかね。

路郎〓そうだ。たしかにそんな風潮があるね。大體從來歳をとつた人は、ものを學ぶといふ場合、必ずいろ／＼な質問、それも先の先の質問をするものだ。子供のやうな氣持になつて學ぶのが一等いゝ方法なのであるが、どうも大人は子供のやうに教はるだけや丹念に頭にたゞみ込むことが出來ない。たゞ智識的に知らうとする。従つて理論のみこむのに急で、練習の方は全くお留守にする。だから大人は眼高手低くの人が多い。教へられたことを一生懸命繰返へして練習すれば上達すると言つただけでは満足出來ない。判つても判らなくても

病源を説明してやらないと満足しないのとよく似てゐる。こゝ言つた歳とつた人達の共通した氣持が若い人達にも漸次影響してゐるのではないかね。

某人〓さうですね。それともう一つは、なにか勞を厭うてゐる傾向も有ると思ふんですが、といふのは、そういふ質問をする人が前に言つたやうに、俳句といふものを知つてゐて、そして俳句と川柳とどう違ふかを知り、それで川柳なら川柳をやつてみようといふのでなしに、ほんの素見的に訊く。

豆秋〓初めから何も彼も知らうとしてゐますな。菊池寛の文藝辭典に川柳は人事の弱點を穿つた一種の狂句であると解説してありました。例句では、よく結んで悪く言はれる後家の髪町内で知らぬは亭主ばかりなりなどの二句を擧げてありました。私は思ふんですが、東京にゐる川柳の大家なんか、あゝいふ文藝人を少し教育してやる必要があると思ふんですね。

りますね。ことに元の雉子郎こと今の吉川英治など、昔の好誼をもつて機會あることに、こゝういふ人達に教へてくれてもよさそうなものだと思ふ。

豆秋〓さあ、雉子郎時代に、は巧い句を作つてゐたとしても、今の川柳のことはよく解らないのではなからうか。夜王〓結局、俳句が普遍化されてゐるわりに、川柳が一般に認められてゐないから川柳のよさを問ふので、そしてよければ川柳をやつて見やうといふ。そういふ點からよく聞かれるんではないのでせうか。

路郎〓そんな人もあるにはあるだらうが、そう解釋するには少し人がよすぎるだらう。某人君が勢頭に言つたやうに、今の若い人達が何らの智識も持たずに俳句と川柳の句別を訊くのは、何も彼も少しは知つて置きたいと言ふ常識的な頭で訊いてゐるのであつて、それを訊いて見て川柳は如何にも優れてゐるから川柳をやろうといふ、そんな考へでの質問ではないと思ふ。そんな質問が出るのは何々文庫といふやうなエッセンス本で色々ものを少しづつ知つてゐて何んでも知つてゐるか

の如く喋べりたいといふ欲望から、その材料として訊いてゐるのに過ぎないのではないか。何とか文庫に漱石が少しあると、それを讀んだらもう漱石が判つた。ダンテならダンテを少し讀むと、もうダンテを卒業したといふやう顔をしてゐる。そういつた文庫漁りが、いつか習性になつて、何かものを訊くときは必ず他と比較して訊く。その習慣が無意識に出てくるのではないかと思ふ。

夜王〓それはありますね。某人〓兎も角、人間が安物のエンサイクロペディアになつて(哄笑)何も知つてゐるかはりに、何も知らない。これが現代の、殊に若い人の共通した風潮ではないでせうか。路郎〓そうだらうな。

某人〓一つのことには夢中に喰ひ下ることは尠ないですね。そういふ點で、まあ御本人を前にしてなんですが、豆秋さんの句境は無器用の徹底した一種玲瓏たる境地だと思ひますが、先生はどうお考へですか。路郎〓僕は九月から有恒俱樂部の川柳講座で、須崎豆秋君の句の鑑賞を續けてゐるが今某人君の言はれた無器用さ

といふ意味は、どういふ意味か、ハッキリしない。句の表現といふ點から觀れば、無器用どころでは無く、却々表現技巧の優秀な作品が多いと思はれるがね。

某人Ⅱ僕の無器用といつたのは作句の上で、といふのはなく、前に話した、器用にあつちをつまみ、こつちをつまみする。これを器用と見て、其の反對に見ての無器用。つまり浮氣をしないのへ、無器用といふ言葉を使つたのです。

路郎Ⅱそれは確かにあるね。そうした浮氣を醫者の方では精神分裂症といふのださうだ。

某人Ⅱで、結局川柳にしる他の何ものにしる、ある境地まで達する爲めには、絶對といふ程の一圖さ。つまり僕の言葉で言ひ替へれば、無器用さが必要であつて、同じ川柳の中に於いてでも、器用小手先で句を作り出す。といふよりも、身ぐるみぶち當つて其のほかの手段を知らぬといふやうな行き方。それを人達は實行せねばならないのではないかと思ふ。

路郎Ⅱそれに違ひないね。私は永い間川柳人の作句ぶりを見て來たが表現技巧が謂ゆ

る器用な作家よりも鈍重な作家と思はれる人の方が、作家としては大成してゐるやうに思ふ。過日姫路の陸軍病院へ川柳の慰問講演をしに出かけ講演が濟んでから有志の作句會を開いた處、一白衣の勇士から「私は俳句も川柳も作つて居ますが、兩方作つても差支へないものでせうか」といふ質問があつた。それで私は「兩方お作りになつても差支へはない。しかし兩方作る人は大抵お座なりの句を作る程度に終つてしまひはしないかと思ふ。」と言ふのは、どちらか徹底的に研究されてゐてすら、二つやると、得てして混同され易い。ましてどちら

も、研究の日が浅いとあつては問題ではないでせう。たとへば語學を學ぶのに、獨逸語と英語を一緒に選んだとすれば、英語の發音をする時に獨逸語の發音が混じり、獨逸語を發音する時に英語の發音が混じつたりすることは、誰れでもが経験すること、この二つの語學は綴り字の同じである場合が多いので、殊にさういふ混亂を來たし易いのである。川柳と俳句も同じ十七

音字型であるから、さういふ混同に墜ち入り易い。亡くなつた松村鬼史は正岡子規門下で有數の俳人で、明治の一茶だともて言はれてゐたが、柳珍堂の名で川柳も作り、川柳と俳句二つながらよくしたとは言へ、最後には川柳人松村柳珍堂として世を去つたのを見て、最後迄二つながら押切つて行くことは困難ではな

いか」と、さういふことを申上げた。それから又同じやうな例として「碁の有段者で將棋のうまい人もあり、又將棋の有段者で碁のうまい人もあるにはあらうが、碁で立つ人は碁の七段八段名人となる爲めに、將棋を指さないやうに思ふ。同様に將棋の名人は碁を打たない。世間でもそれが當然だと思つてゐるやうである。まあどちらかに徹底した方がいゝでせう。」といふ返事をして置いたが、單に映畫を見、漫才を聞く程度なら、それで満足が出来る人なら、二つやらうと三つやらうと差支へはない。

某人Ⅱ方面は違ふが徹底してゐますね。

某人Ⅱそれは別ですが。嫌ひなものに絶對に食べないと言ふかほるさんなんか、其の點徹底してゐるんじゃないですか。

某人Ⅱ方面は違ふが徹底してゐますね。

丹路Ⅱ本當だ。あの人は御馳走をよばれに行つても、嫌ひなものは絶對に食べませんからな。

獨身時代の作家が何故永續せぬか

夜王Ⅱ獨身時代に川柳や俳句をやつても、妻帯しても變らずに、ずつと最後迄やりとげる人は尠ないのではないかと思ひますがどうでせう。妻帯すると自分が一家の主人として新しい社會での活躍をせねばならないし、また家庭的にも色々煩しい仕事も殖へてくるし、さういふ關係で心境の變化を起し易いのではないでせうか。

路郎Ⅱ川柳だけではない。大抵の趣味について言つてもそう言へるだらう。まあ短歌でも、俳句でも、川柳でも獨身時代から作つてゐて妻帯後

も作り、孫が出来ても作るといふことは、一つのものに何處迄もねばり強くやる性格の持主でないといふ出来なことです。趣味といふものは環境の變化によつて、ばつたりやめて仕舞ふといふ人が大半である。それは、趣味とは言つてゐても單なる遊び程度であつて、どんなことを書いたり喋

べつたりしてゐるとしても、生活に深く根をおろしてゐないからである。

某人Ⅱさうでせう。さういふ人は謂ゆるお楽しみ程度の人であつて、實際さうした境遇の變化にあふ迄に、ある年數なり、勉強なりを経て來てゐる人は、恐らくずつと續けるやうに僕は思ひますけど。現に此處に實物見本の丹路君が居ますが、丹路君は生活環境の變化によつて、川柳に對する考へとか態度とかに、一種の危機を感じたかどうか。どうです丹路君。

丹路Ⅱ危機は別に感じなかつたですね。しかし、こゝにいふことは言へると思ひます。その獨身時代ですが、年齢的に若い間は、若さ自身もつ情熱だけで實作してゆく。それはそれでいゝと思つて作句してゐて、總て年齢的に大人になつて行けば、若さ自身を持つ情熱でなしに、人生に對する情熱。或は社會觀照の深さ。さういつたものが新しく自分の川柳實作の對象に變つて行つたと思ふ。

作家の奥さんと川柳眼

豆秋Ⅱ新妻が川柳のよき觀

豆秋Ⅱ新妻が川柳のよき觀

豆秋Ⅱ新妻が川柳のよき觀

豆秋Ⅱ新妻が川柳のよき觀

豆秋Ⅱ新妻が川柳のよき觀

賞者であり、それが一つ川柳作家になるといふやうな人は幸福と言はねばならぬ。まあ、例へば緑雨氏の如き……

某人〓作る、作らぬは別として、川柳家の奥さんには川柳眼を持つ人が非常に多いやうですね。

豆秋〓實際そうですね。私なんか、いつも愚妻に選をされます。割にいゝ句をとつてみますね。

某人〓御馳走さま。

路郎〓川柳家の妻君はすめられても割に作らない人が多いが。批評家、尤も御主人の句とか、或は雑誌に載つた句を、御主人に對して批評する人は非常に多いやうである。多田市多樓君の妻君は、近頃ではちよいゝ句を見せられるが、以前はその批評家であつて、御主人がノートに句を残して出勤され、帰宅後そのノートを見ると、句の上に「平凡」などと、批評してあつたさうだが。何故奥さんが勇敢に句を作るとここまで進出されないかと言へば大抵は御主人が妻君の句を批評する場合、眞面目にリードしてやるといふよりは、頭ごなしに「こんな句は駄目だ」と鐵槌を下すので、まあ作らん方が無

難だ、といふように（哄笑）切角カクツムリが角を出しかけてゐるのにその角を押へて仕舞ふと言ふやうな結果から妻君は作家といふよりも批評家の方へ廻つて、御主人の句を「平凡」「陳腐」といつた式に、批評されるのではないかと思はれる（笑）長崎博士の奥さんも稀に句を作られるが、批評家としてはなかく大したものである。柳秀博士の句に、常に鐵槌を加へてゐられるやうに想像される。尤もこの鐵槌は、家庭の圓滿を欠かさないとところに、一つの特色があります。斯うした特色も矢張り川柳の妙味ではないかと思ふ。

某人〓御主人が抑へる抑へないといふことは第二段としても、兎も角先に批評眼が出來上るといふことは事實ですね。その爲めに、一つは句を作らなくなつて仕舞ふ。さういふことも言へますね。

路郎〓君のともさうか。ハム、さういふ人もありますね。

夜王〓私とこの愚妻も、以前は作つたのですが、子供が出來てからは作らなくなつてしまつた。

某人〓一度月評會で奥さん

連を集めて「主人をやつつける會」といふのをやつてはどうです。（一同哄笑）

丹路〓先程の夜王さんの話に戻りますが、結婚してから作らなくなるのは、男性と女性の場合ではその事情が違つてゐると思ふ。女性の場合は結婚してしまつたら、今日のやうな女中難の時には餘計に忙しくなつて、實際作れなくなつてしまふんでせう。男性の場合は結婚してから止めたといふ人を、あまり氣がつかないが、結婚してからは本當に句に對する深みが出てくるんじやないかと思ふ。川柳自體に深みを持たすには、矢張り人生を見る眼の深さが要求されると思ふ。だからむしろ結婚してから川柳に本腰を入れねばならない時に、川柳をやめるといふのは實に惜しいものだ。

某人〓今のね、男性と女性の結婚後がどうであるかと言ふ點ですね。それは忙しい忙しくないと言ふよりも、もつと別なものでないかと思ふ。つまり結婚は女性に於いては一大轉換であるけれども、男性に於いては一つの附加にか過ぎない。といふことじやないかな。御主人だつて、あ

れやこれや相當忙しくなりますよ。そこで問題は一寸變つて、今度は忙しいから作れないといふ人の言葉をよく聞くんですが、さういふ人達に先生から何か言つて貰つたらどうでせう。

多忙で作れないといふ作家に

路郎〓永い人生であるから實際、のつびきならぬ忙しさと言ふ時期はあるものであり、川柳も作らずにあわたゞしく二月や、三月が過ぎて仕舞ふといふことは肯定出來るわけであるけれども、其處でその作家のものに對する態度の如何によつて、甲は忙しいことから作句を中絶してしまひ乙は單に一寸休んだだけであつて、少しでも忙しさから逃れ得たら直ちにもとの軌道に乗つて作句を續けると言ふそれだけの違ひだと思ふ。本當に川柳が好きであれば己むを得ない忙しさの時に作らなくとも、その忙しさの間に蓄積された思想は、次の少しく暇を見出した時期に堰が切れたいやうに、一度にどつと流れ出て來るものである。そうして永く〓作句を續けて行くのであるが、何等かの機會で

作句を初めた人は、忙しさといふ、一寸した絶縁體に妨げられて、元の軌道に乗る機會を見失つてしまふ。それが相當の日數を要してゐるうちに又他の趣味に移る人もあることをよく見掛けるのである。恰度、日記をつけてゐるやうなもので、忙しくてブランクページが出來ても、ブランクページはブランクページとして次の日から日記を續けて行けば、日記といふものは續け得られる。ブランクページが出來た時に、幾ら考へて見ても一週間に前のことがどうしても思ひ出せない。もう次を續けて行く勇氣が無くなつた人は、永遠に日記とは縁なき衆生になつてしまふ。だから、幾ら忙しくてもブランクページが出來ても、その續きを書き續けるやうな態度で、川柳に臨んで欲しいと思ふ。

そうすれば、その忙しかつたブランクページは、永い一生にとつては、ほんの僅かな時間ではかないと思ふ。

今日は句について喋べらなかつたが、讀者には非常に有意義な問題を採りあげたことと思ふ。では之れ位にして置かう。

塔柳川



=選郎路=

横濱 福田山雨樓

停年の辭表も書けば手がふるへ
 一日も海を訪ねぬ夏だつた
 脊の痛みをそれで初老を意識する

穴澤監察官勇退さる

數多あるニツクネームを返さるゝ

大島監察官榮轉さる

菊薫る日を前にして重き椅子

兵庫縣 奥村丹路

應接へ不幸な人を迎へ入れ

美穂子誕生(五句)

明るき日おぼつかなき眼をあけとぢす

ふたりの子の父となりしか窓に立つ

父と言ふ字が脅迫に以て迫り

言ふこともなし母も子も眠れ

喜びも追々地味に箸をとり

大阪 大西八歩

上高地にて

五千尺までは背廣の姿で來
 水打つて佛心になつてゐる

アダダダダ、アバババ小兒科ひまがいり

布哇高澤一浪

片戀の人を殘して召され征く
 現金で買うても月賦だに見られ
 憎まれて儲けがやつと小一萬
 河豚料理あなたと死ねば本望だ
 釘付にしたは醫や腫にあらす
 聲明書向ふの都合など知らす

大阪 戸田孤篷

父逝く

旦那さんとは僕の事でした
 告別式父の表札撮つておく
 父逝つて家の廣さにあきれはて
 父逝く日すでに世間の眼と出逢ひ
 信託をたよる氣になるひと七日
 死の病狀くりかへさせる客が來る

兵庫縣 戸倉普天

ごみ箱を漁つても、大阪生きて行き
 一つしか賣つて呉れぬにムツとして

六ノルル 前山北海

登録の資産とて無き氣安さよ

あきらめは行季一つで來た自分

上部のみ太平洋に浪荒し

櫻見す凍結だけは免がれぬ

ハンドルを握れば酔つた人ならず

批評みな笑顔で受ける年となり

立腹の日記すらく筆が立ち

夕焼けに白痴の男背を向け

立案者こんな管ではなかつたが

大阪府高石町 米本貴志子

孤篷氏の父君逝去さる

取り除けた礎石の穴の大き過ぎ

兵庫縣 水谷 鮎美

秋をゆく虚無僧だけの徑靜か
硝子越し聞えぬ秋も寂しかる
俗物の肩ゆすぶつて灯にちかき

大阪 大坂 形水

臺變る若さになつて出征す
癒つたら連れて行くことたんとでき
父ちやんが押す乳母車二人乗り
クリーニング鉤かゝらぬ服となり
今の世に焼松茸もふぐちりも

大阪 橋本 綠雨

春日ヶ丘

萩の花こゝにこれだけ土地を持ち
箕虫をとれば年寄くさく見え
ケーブルカー兩方萩の眞盛り
子を持たぬ親も駄菓子屋のぞきこみ

大阪 高橋 かほる

ボケツトをモンベに着けて見たくなり
一反は要るしとモンベ縫いながら
感激を續け隣寸を二本摺り
ひとえ物下女に一枚してやられ

★

下關國 弘半 休

順番へ忙しい日を無駄に居る
防空壕小供だけでも入れましよう
大陸の土を踏む娘の船が出る

山口縣 岩崎 勇 記

燈火管制女房のほどく帯の音
追突顛覆肩身の狭い日が續き
間引菜が昌で賣れるも時世也

西宮 阿萬 萬 的

ペンネーム僕にさみしい過去がある

秋寒し自分の敷いた床に寝る

伊丹 酒井 美知夫

長靴をはいて気がねな朝のバス
高潮へ子の長靴は嬉しもう
俄雨質屋は傘を貸しもせず

首吊つて死ねと忠告度を過し

尼崎 飯尾 寄與史

夏服の白さが目立ち轉業す
落伍した譯は毬栗下げており

大阪 浪玲 之介

故里の百姓を想ふ
平民の先祖は斬られ損だつた

南栗見君へ

想はれて居るとも知らぬ擧手の禮
モンベーもはつきりお嬢様と知れ

大阪 津路 紅多呂

ものすべて秋の暮色に引き込まれ
アレ御覽グライダーが飛ぶ秋の雲
秋晴れの明るい部屋にいたより

徳島縣 穴吹町 姫田 夕 鐘

こつてりと塗り電髪が山羊に似る

陳情に來た縣廳で意見され
べつたの手垢が子の匂ひする
流失の橋にぼかんと岸に立ち
藁屋からテノートルと云ふが聞えて來

大阪 須崎 豆 秋

歸 省(弟の死)

ボケツトの数珠もさみしいすみれ丸
弟の魂とも見ゆる燈が一つ
ふるさとが近し眼鏡の玉を拭く
モンベイの千代鶴さんと見えぬなり

銀行はわが家に隣す

銀行の灯は減配を語るらく
紙幣束を貸す早春の掌にのせて
銀行に置く盆栽の人臭く
商才をゆるめず遅日貸越して
銀行で待つ新しき出發よ
銀行の貌をうかゞふ筆遣ひ

大阪 正木 水客

盛装でくる面會は花を持ち
訥辯は訥辯として理をまげず
ハツキリと女醫に手術をすゝめられ
二重あご女肥えてるとは云はず
喫茶店を探して歩く雨のなか
直傳と云ふ人相を見て呉れる

豊中 黒川 紫香

二三匹蛙は川へ逃げ損ね

大阪 丸尾 潮花

歌少し詠める妓が月へ立ち
子澤山背廣の父も一人負ひ
歌が好き詩が好きそれで女給さん

亡き森本秋子を思ふ

まつしろな紙へ生命をきざみつけ

神戸 岡田 某人

金なんか何だと或日又思ひ
利息算あほらしくなり梨を剥き
下足番こんな靴とは思へども
正論を吐き隅つこの座へもどり
名案へ暫く時機を待てといふ
どんな世を見て來た紙幣か千切れかけ
野を戀ふやしきりあたまの中も秋

近況

松本 石曾 根民郎

内職も縁ぐ國民服の父
丹精のコスモス保険醫ほめて去に
端た金と思へど腹の立たぬ宵
代筆で來た請求書にちとあわて

大阪 北川 春巢

子を負うてこれが生活ですと妻
乗馬俱樂部のおつさんの靴光つてゐ
恥しい腹姑と風呂へ來る
病人の枕の下のボチ袋
競馬場仁丹をかむ餘裕あり

下關 櫻川 不水

おつたまげた上どなられた交叉點
石油など出るからイラン罪があり

從弟へ

四人目も男ますく剛毅だね
答禮に草疲れる程偉くなり
段違ひ助言も出來ず猫とゐる
鶏は生めどもくとは云はず

廣島 濱田 久米雄

コスモスへどうにかならう秋深む
丸いものがみんな錢に見える或る日
やりくりの横で仔猫がたはむれる
月給の袋何時もの溜息か
靴の破れに氣付く職域

大阪 魚住 滿潮

淀、鳴尾、皆んなに會す顔がなし
減私奉公、かるくしくも筆を執り
轉業のなるほど汗の出る仕事
鯛々と三日續きぬ
味はつて飲んで欲しいと云ふお酒

尼崎 酒井 斗風

人を斬る刃トツテンカンと打ち
幻想のいま法律にふれんとす
手品師の白紙吹雪になつて散り

大阪清水史路

眞先に來た常會は額に立ち
休閑地みなあなどれぬ腕となり

休閑地

お婆さん力むでゐるは根太草
ある時はすた／＼すたと京の僧

陶の匙膳の上にも世は廻り

本棚も燈下親しむ艶となり
問へば子等あれあの糸瓜咲くお家

下關多田市多樓

驛長をオヤジと呼んで親しみぬ
物忘れすれば年だと言はれたり

山盛りになされて鯛は鯛の値
捨てるにはおしい人だが落つかず

廣島大森風來子

起床ラツパ故郷の夢が眞ツ二つ
就寝ラツパ泣いた昔をなつかしみ

岡山鈴木九坡

何ゆえの淋しさ汽車を見て歸り
休閑地隣りの出來は知らぬ振り

職業婦人ですとは仲人まだ言はず

岡山逸見灯竿

A B C D 皆逃げ道をきめておき
騎風へ傘をたゝんでぬれて行く

校長の髭も笑つた空閑地
手のひらへ故郷の餅のまんまるし

ハイラル宮岡白峰

新聞紙ルーズベルトも叱つとき

秋の山蔭介石の顔に似る
露人今戀をしてゐる犬に似る

大阪夷一笑

手術せよと云ははるけれどそやけれど

住かへていで湯の町やみなと町
御命日自花をたいもどつて來

空の青ガラスのよこれ目立つ頃
番臺をさせて娘の嫁きおくれ

降り遅れ追突事故を寒う見る
御主人の隙みて猫をなぐりつけ

大津鈴木石鹿

借りに來た嘘へ負けない嘘をつき
一列の裾へ秋風容赦なく

詫びるより金を返せと仰せらる
終電車時へ急ぐ音となり

骨董屋玉露を出してから儲け
とむらひの路にふさはし曼珠沙華

曼珠沙華旅の心を淋しくす
それ松茸と病人の鼻の先

有難や名月軍人墓地にあり

今治月原宵明

無駄排除こつそり花輪拂下げ
列車事故前がいゝとか悪いとか

カットグラスの知的な光秋立ちぬ
山麓に朝な夕な煙を立て

秋の雲瑞良に結うて昇りたし
ことも無く松茸山が明け暮れす

ハイカーに又いかれたり綿の花

大牟田高田抱逸

坂

麻生アト

カ



川柳 史界世

(VIII)

戸田孤蓬

東西ローマの分裂

ローマを滅すものはローマなり。順境の恩寵感を抑へ切れなかつたのは西のナポレオン東の豊太閤ばかりでない。没落の過程として東西ローマ帝國がコンスタンチノーブルとローマに各々その中心を置く。ゴールのアラリックと政略的和議を取結んだ名將スチリコの苦衷は酬いられず蠻族の蹄に華のローマが蹂躪される。

反戦論美女と縁酒の前でする
ロポツトにローマの名前だけつけさせ
民族大移動史子供を乗せた馬を引く
遺蹟さへ残さぬ程に奪はれる

匈奴王アツチラ

秦の始皇帝、東西の漢をなやました匈奴は西へもその手を伸ばす。ゴール人の西遷も元を正せばこの壓力の結果だ。その一大酋長アツチラはトロイヤコンスタンチノーブルの宮殿よりもつとデカタンなアツチラ館を建てたり西ローマ帝の妹と戀をしたり、その戀が遂げられないといつてローマに攻め入らうとする。但し粹人の司教がローマにゐてこの戀を許したのでやつとその惨禍をまぬがれる。有名なドイツの古譚詩ニibelゲンリードはこのアツチラ的事件を取扱つたものだとか。アツチラの強勢に全歐は恐怖して何でもこはいものは皆ファンと呼ぶ様になつた。

四世紀圖匈奴インクの様になり
異端迫害文化へいやくはかりする

西ローマ滅亡

東ローマはとにかくとしてローマ市を中心とする西ローマの最後の日は来た。スペインを廻りカルタゴに神輿を据えてチベル河を海から攻め上つて来たゲルマンの一種ヴァンダル族が介錯人。その酋長オドワケルはローマ入をした時ローマの元老院は亡國宣言書を發表しオドワケルを八歳の幼帝の攝政とし、後遂に彼自らか頭首となり西ローマ亡ぶ。これも長つゞきせずカロール大帝のフランク王國の建設へと進む。

ゴンドラでローマの止め刺しに来る
亡國宣言傍聴に来るオドワケル

(九) 歐洲暗黒時代上

マホメツト

叡山や高野や根來の僧兵達とちがつて教主自ら劍とコランをひつさげて布教の第一線に立つたマホメツトは世界偉人の一人であつたカルタゴ亡びて以來はじめてセム族が史上に頭を出す。その勢ひ中

歐を席捲せんとして席捲し得なかつたとはいへアジアからぐるりとアフリカをまわつてイベリア半島に至る地域を占領、中世暗黒時代を通じて古代文化を傳承、スペインのゴルドバにその遺跡を残す。

神様を自稱すれども逃げもする

黒幕の力もによるマホメツト

コラン説教お面お小手の型も見せ

女にも不自由させぬとピラに書き

アラビア語一ろにだけのこり

アラビアの駱駝は星の位置も知り

封建制度

統一者を失つたローマの故地は分裂に分裂を重ね、今後八世紀が程は所謂くらやみのヨーロッパ。自然の要求が封

建制度を産む。婦人崇拜の騎士達が飾り馬を乗り廻した時代。
かへことに来てもうちには喰べるだけ
寶石屋お城の道をきいてゐる
騎士の道キツスの作法なども説き

サンチヨウは失策帳を奉り
闘技會レディーへ捧け槍の禮

カロール大帝

ヨーロッパの新秩序はゲルマンの酋長カロールによつて建設される。法王よりローマ帝國の後繼者だとおだてられ、後分裂して獨佛伊三國の基礎がこゝに立つ。

うっかりと金の冠のせられ
御臨終三分をした地圖をお

き
ローマ皇帝ですとさその晩眠られず

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療

佐多愛彦 加藤謙一 螺良四郎

院醫多佐

町北島堂電大

ノルマン

海賊、貿易、戦争、この命題を如實に物語るノルマン、スカンディナビアから、ロシアへ、ユトレヒトへ、ブリタニヤへ、そしてブリタニヤの子孫供ジョンブルはしようこりもなくユニオンジャックと云ふ海賊旗を七つの海にひるがへしたのもこの邊が起源。

海岸線ノルマン人はそらん
じる

ノルマンは北極光の話する
英艦にあるノルマンのマス
コツト

神聖ローマ帝国

ローマ、コンスタンチノブル、アレキサンドリア、アンチオキヤ、イエルサレムの五本山のうちサラセンの侵入から取のこされたローマとコンスタンチノブル、しかもローマの本山に傑僧が多くあらはれて本山の本山となり法王を専稱する。この法王とカール大帝のフランク王国が交流して覇者であるカール大帝の子孫オットー大帝は神聖ローマ皇帝の加冠を受けて、氣をよくし各々その分を守つて

仲よくしてゐるかと思ふと早速喧嘩をはじめて皇帝を雪の中に跪坐して謝せしめたグレゴリー七世と云ふ怪僧が現はれたりする。

法王候補政治の講義も少しする

氣の強い法王もめた法王史皇帝を顎でつかつて贅肉がふえ

十字軍

百里の道も遠しとせず本願寺詣りをする善男善女の様にキリスト教徒にとつてパレスチナ詣りは大きな魅力であつた。その大切な所を異教徒に侵入されたものだから法王自ら總司令官格になつて聖地復軍を起した。それが二世紀にあまるロマンティックな、てんで骨折損に終つた、しかし次の時代の黎明を約束する十字軍の出来事であつた。

ウイニングは法王様に送るだけ

や、こしく戦ひ聖地又とられ

法王は教へる外に儲けもしアツシ、の聖者を少しむたがり

貞操帯の合鍵兵は捜さ、れ



赤い折靴

鈴木九坡

ものより出来ぬといふならば、それは少々淋しいことであらう。「簡素の中の美しさ」こそ本當に現代の女性に要求されるべきものであらうと思ふ。尤もあのゴテ／＼したスタイルをもつて、ユニークなるスタイルと稱するものであるならば又何を言はんやである。

父が他人

大森風來子

好きなひとがあると、女の會話は、等比較的的にもつちかしくなつて来る。

あなたの句を漫畫に

話題を提供する。沈黙は絶対に禁物。——するも、素性をはつきり表現して貰ふから有難い。と。女の虚榮心は、田舎風の父を他人にして、街頭を闊歩する位は、朝飯前である。

★本誌愛讀者のために、漫畫揮毫頒布をいたします。御希望の方は左記規定により至急申込ませたい。
★揮毫は色紙に限る。★句はあなたの句であること。一句を色紙一葉に揮毫。一人五葉以内、但し句は餘分にお送りを願ひ揮毫句は當方に一任のこと。御希望の順に句に番號を添へられ、なるべく貴意に添ひます。★希望者は申込みと同時に、揮毫句一句につき費五拾錢同封のこと(切手代用可)色紙及送費は當方負擔。★作品はお申込み順に發送いたします
★揮毫擔當 後藤田凡生氏
★申込所 大阪市西區江戸堀上通二丁目四六
川柳雜誌社サービス部宛

近頃むやみに増えた洋装の娘達が、二三人派手な笑ひ聲を立て、話し乍ら歩いて行く。それが映畫の話であるのか、お汁粉が喰べられないので困る、といふ話であるのか、それは知る由もないけれど、申し合はせた様に、ぶら提げらるるあの赤い大きな折靴の中には、屹度スタイルブツとノードと巻尺と、そして其の他もろ／＼の凡そ洋裁に必要な物はすべて入れてあるに相違ない。丹羽文雄であつたか、最近の女性への興味の焦點は、曾ての女給やダンサーから現在では「洋裁する女性」へと向けられつゝある。と言つてゐるがむべなるかな、お茶やお華を習ふ代りに、赤い折靴をぶら提げる女性の増えたことよ。それはまるで女學校を終へた着の次に來るべき當然の課程へ送進んで行くであらう。然しそれは必ずしも悪いことではないが、いや洋装こそむしる働く人達には當然要求されるべき服装ではあらうが、あのいさ／＼か崎形的なスタイルの氾濫はちとどうかと思へるし、しかも相當な時間と費用を掛けて遂にあの程度の

御入院は
— 需に應ず —

谷内小兒科病院

醫學博士 谷内與一郎

大阪市港區市岡元町一丁目(電車道)

電話 西 四四八八 一 番



吟行地
調べ

奈良篇 (九)

麻生路郎

(43) 轉害門

★轉害門は東大寺の創建當初の遺構の一つであるが、現在では偏在となつてゐるので觀光客の多くは見逃してしまふ。

★この門は平城京の一條大路に面して居り、その大路が佐保路といふ名をもつてゐたので、正しく云へば佐保路門なのであるが、ここで寺の鎮守、手向山八幡宮の轉害會が年中行事として行はれてゐたので轉害門と呼ばれるやうになつたのである。

建久の大佛供養の際、平家の侍悪七兵衛景清が源頼朝を狙つて此の門に身をひそめてゐたといふ傳説から景清門と

いふ異名もある。

★門の正面の軒端に太い注連繩が張つてあり、中央の石階を上つたところに神輿をおく石がある。その上に組入天井が張つてゐるのは神輿に敬意を表したのである。

★今人の句。

轉害門極大といふ注連を張り 霞乃
轉害門くぐりを開けて抜けさせる 同
轉害門見通しきかぬとこへ建ち 同
景清を見かけたといふ門閉まり 路郎
置き忘れたやうに轉害門は立ち 同
轉害門又金持に欲しがらぬ 同

(44) 北山十八間戸

★北山十八間戸は奈良公園から北へ十數町、般若坂に登り切らうとするところにある。

★これは鎌倉中期の名僧忍性菩薩が癩病患者救済のために建てた宿舍で、初め般若寺の東北にあつたが永祿十年八月に焼失したので、鎌倉時代の様式で今のところへ再建したのである。

間敷十八間の平家建で、僅に建物として遺つてゐるだけだ。内部の設備は何もない。床板のままで、畳も敷いてない。部屋の横に押入らしい上下二段に仕切つたところがあり、上段に敷居が残つてゐるところから見れば襖か障子があつて衣類や蒲團を入れたところらしい。

★北山十八間戸の存在は六百年前に、既に社會事業が實施されてゐた譯である。この遺址は大正十年三月史蹟に指定された。

★十八間戸を次のやうに川柳する。

十八間戸素性あかさぬ人もある 霞乃
十八間戸ヨルダン川はな いけれど 同

十八間戸浮世離れた日向 路郎
ほこ 同

十八間戸秘めたる戀もありつらん 同
十八間戸小さな恨みもつて死に 同
十八間戸佛の力たよりぎり 同

(45) 般若寺

★般若寺は北山十八間戸から北へ二丁ばかりのところにある。あると云つても、荒廢してゐてもう寺らしい寺ではない。

★この寺は白雉五年十月、蘇我日向の臣宇無邪志が、孝徳天皇の御不例の際御平癒祈願のために創立したもので聖武天皇の頃には官寺であり實に壯麗を極めてゐたのであるが平安食都以後次第に衰微し數度の火災で僅に樓門を残して全く荒廢してしまつたのである。

★大基壇上に立つ十三層石塔婆(國寶)は聖武天皇の御建立であり、その臺下に大般若經を手寫しでお納めになつたと云ひ傳へられてゐる。

★塔基壇の前に對立する石標は笠塔婆と云つて宋の歸化人伊行吉が父母の供養のために建てたのであると云はれてゐる。

石築遺構として珍らしいので國寶となつた。嵯峨天皇の宸筆般若寺一の門額も國寶である。

★なほ般若寺は護良親王が賊に追はれ同寺の經櫃の中に潜んで難をのがれ給うたと傳へられてゐるが、その際の經櫃は今も西大寺に保管されてゐる。

★次のやうな川柳が出来た
歸化人も孝を傳へた笠塔婆 霞乃
般若寺の鍵持つ人が街に 同
住み 同
歴史的經櫃までも他寺へ 路郎
置き 同
般若寺で遊べと子ども追ひやられ 同
その額も嵯峨天皇で知られたり 同

(46) 奈良團扇

★奈良團扇の名は昔から有名である。これは春日社の神人の手内職として生れたものである。江戸時代でも、上品なものと優美なものとで全國にその名を轟はれてゐた。夏の贈答品として大變よろこばれ、六月の土用入には奈良奉行から、江戸の將軍、老中、若年寄、御側衆、京都の所司代などへ奈良團扇を献上すること、一つの例となつてゐた。

★「奈良曠」といふ書には團扇屋として、野田禰宜町の春日承仕三島家益、高昌松南院辻子の春日禰宜南郷權左衛門、高昌北ノ大道の春日禰宜梅木孫之丞、高昌新開町の丸山八兵衛の名が見えてゐる。江戸時代になつても奈良團扇は主として春日の社人の内職だつたのである。

★明治十四年ごろに、天平模様などの透し切り抜き扇を造つた。天平團扇と稱して現在でも製作してゐる。一寸雅致があるので文人墨客にはよろこばれるが大量にはうれないやうである。

★古川柳に詠まれた奈良團扇の句を二三、次に紹介して見やう。

鹿の背をわけて團扇屋大騒ぎ
奈良の風諸國で暑氣をし
のぐ也
知つたふり團扇の芝は奈良にある
いにしへの都の風を丸くうり

などがある。一鹿の背をわけては夕立が来たことを云つたものである。

(47) 案内人

★三條通りに、奈良名所案内組合事務所といふのがあ

る。案内人の溜り場である。現在案内人は四十人ゐる。こゝへ前もつてハガキ一本出して置けば、團體の幹事もまごつかないで済む。團體でなければ宿から電話しても案内人を寄越して呉れる。

★奈良を一時間や二時間で見やうといふのは無理である。大佛の鼻の穴を見あげてその偉大さに驚いてゐる時間でも、五分や十分はかかる。ザツと案内して貰つても、

人皇四十五代聖武天皇から聞かされてゐると四時間や四時間半はかかる。学校の先生などが修學旅行に來られるのに、奈良に、も少し時間を割いてい

ただかねば満足な案内は出來ないとは案内人側の聲である。大いに尤だと思ふ。行程のプロ編成係の心得置くべきことであらう。

明治廿年頃から現在までの案内料の變遷について少しく

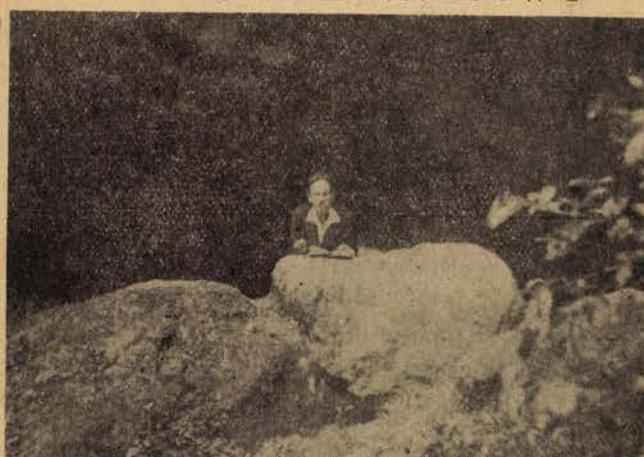
書いて見やう。明治二十年以前には案内人一人一週りで金八錢なりであつた。當時白米一升が四錢だつたので白米二升の案内賃だつた。それが明治二十年に拾二錢となり、其後、十八錢となり、廿五錢となり、大正五、六年頃には三

錢である。警察の規則では團體十五人に案内人一人といふ割當になつてゐるさうであるが三十人位までの團體なら一人の案内人でやれるさうである。奈良の案内人は一カケ流しではない。(カケ流しといふのは歩きながら説明をするのをいふ)説明をしなければならぬところへ來るとそこへ立ち止まり、團體を一所に集めて説明をする。斯うして豫定時間中に案内をするのである。

★現在案内人は試験による免許制になつてゐて合格者は免許案内人と記した巾一〇センチ、丈け四〇センチの腕章を腕につけてゐる。明治三十四、五年頃、はじめて免許制度となつたのであるが、一度免許されたら一生資格者といふ譯でなく、毎年一回試験が行はれ試験に合格しなければ資格を失ふといふ制度で、案内人にとつてはかなり手痛い制度であつたが、現在では五年目毎に試験をうければいいことに改められてゐる。

この外に、ひん中(半日のこと)といふのがある。これは案内人一人一圓五十錢である。一日雇切りだと二圓五十

十八錢となり、更に五十五錢となり、現在では七十錢である。



(照參事記號前) 幹主郎路と窟窟編山奥日春

隨分出鱗目を喋べるものとして輕んじられてゐたが、免許制になつてからはそんな連中はなくなつた。事務所の奥の間には大きな圍爐裡が切つてあつて、こゝで案内人たちは終業後に座談會を開き、學者や觀光客の異説に對する研究をするんださうである。

★案内人を川柳でスナツプした。

案内人國の訛りも心得る 腹乃
春霞案内事務所誰もあらず 同

案内人發車時間を又聞かれ 同
足弱が居て案内人ちと困り 同

案内人聞いてゐるのかとも云へず 同
案内人こゝでは谷へ響く聲 同

案内人學者の説をくつがへし 同
案内人咲いてもぬない八重櫻 同

案内人よくも覺えた數字なり 同

案内人の事務所も三箇所にある、案内人も七、八十人ゐたさうである。

★從來、案内人といへば、

ち食るとんかつ
店 湖月
ち食るとんかつ
ち食るとんかつ

武玉川四編研究 (二四)

梅 本 塵 山
森 東 魚
蛭 子 省 二

(570) 舟軍たらけの來たる南風

省二「南風をくつた飴細工のやう」といふ俚諺がある。だからけしまうのだ。舟軍が南風をうけて、だ

らけてしまうのでは敗戦だ。
東魚「南風は心地よく睡を誘ふ。作つた句だが、かうもあらうかと云ふ洒落氣分に、可笑味を感じる。」
塵山「優柔なる平家の軍兵であらう。」

(571) 書町寒くくらす觸狀

省二「觸狀(廻狀)があつたので皆が心落ちつかず、ただ靜かにして過ぐす。「寒く」で事柄の内容が察せられ、不安の狀態を寫す。

東魚「不逞の者が入り込む様子だなどと、觸れが廻つてきでもすれば、一町内慄然とする。即ち「寒く」である。」

塵山「現代に於ても、木炭の切符制、水道の時間制等の觸狀、慄然たらざるを得ない。」

(572) 今死に體のさしみおもしろき

省二「初體禮讓。「今」死んだのだから一興。

東魚「原本を燒失したので確な事は云へぬが、「さしみ」は「之」を「ミ」と誤讀したのではなからうか。「體のさし」ではないかと思ふけれど如何であらう。」

塵山「有名な「鎌倉を生きて出でけん」の句から考へた句と想ふ。」
省二「私の所持本では、「ミ」と讀める。次の句の「ミレハ」よりも一層明瞭に「ミ」と讀める。「さしみ」でも「さし」でも句意は等しい。古川柳には「刺身」と詠むものは多く、「さし」としたのは無くはないか。」

(573) 追けてみれば不斷の女也

省二「餘程、後姿がよかつたのであらう。こんな事は時にあるものだ。「不斷」はあたりまへの意。不斷着などを用ふ。」

東魚「不斷は平凡なと云ふ意に用いたのであらうが、一寸變つた云ひ方と思ふ。」

塵山「近頃は有名な文士までが、此の「不斷」を「普段」と當字を書いて居る。」

(574) 香て廻れハ五ツ玉川

省二(349)「玉川の一ツは悪く言はれたり」。高野の毒水をのぞき五玉川はのめる。詠み古るされた材料。
東魚「前説通り。」
塵山「たわいの無い句であると思ふ。」

(575) 出入女を鶴のはし

省二「家に出入りする女を、橋渡したのである。(牽牛織女は烏鵲の翼の橋を渡つて相見ゆ)。」
東魚「戀のなかだちである。」
塵山「『太平記』にある、侍従といふ女など。」

(576) 恩の紙燭の捨所なき

省二「紙燭の燃えさしではあるが捨所がない。今迄役立つたものなのだから。一寸した人情の機微。」
東魚「一寸照らしたら用の足る事であつたが、折角の紙燭をすてるとすまぬ氣がする處、誠に妙である。」
塵山「『恩の紙燭』は、外に何とが言現はされぬもの歟。」

省二「然り。「恩」の字を、もつと深く考へてみれば、紙燭を與へ呉れた人と思ひたくなる。」

(577) 此世の風のかわる穴藏

省二「地上と地下の穴藏とでは、空氣の感じが違ふ。臭氣も違ふ。穴藏へ這入れば、一寸しむみりとするものだ。昔は穴藏屋といふものがあ

つた。穴藏を掘る職人だ。
東魚「夏など、夏利用するものだが「ひやく」とする。奈落へ落ちたらと云ふ氣分で、「此世の風」とやつたのであらう。」

塵山「平凡のやうだけれど、事實にあるところの面白い句である。」

(578) 水と火の中を流る、白拍子

省二「『水と火の中』とは、不和を意味するの。『流る』は流れの身に掛かる。白拍子の職城職柄を詠むだ作。」
東魚「戰場を流れあるく意味ではないか。」
塵山「佛敎の所謂二河白道である。」

(579) 抜けた大根で道をおしへる

省二「古川柳には「ひんぬいた大根で道を教へられ」。一茶の句は「大根引大根で道を教へけり」これらの句に就ては、曾て批判した事がある。」
東魚「一茶句集から、かの句は抹殺すべきである。」
塵山「三句の中で「ひんぬいた」が最も可いと思ふ。」

省二「私も「ひんぬいた」を最佳なりと説いた。一茶作は教科書中最も多く採用された俳句なのだから困

(580) 小春と云ふも冬の愛相

省二「小春日和には背中などほして嬉れしいものだ。確に冬の御愛相

である。小春といふ文字からさへ、さう感じられもする。(古俳句に「病る身の蒲團を替る小春哉」がある。残念ながら病弱の私の境界では小春の愛相には感謝にたへぬ)。
東魚「こう云ふ句法は、武玉川其他當時江戸坐の独特な處である。
塵山「現代の作家達には、斯ういふ事が云へぬやうである。

(581) 師匠を尻に敷島の道

省二「夫を尻に敷島の道」(武17)といふ以上だ。恐しきは歌よむ女か。(武9に「持参を尻に敷島の道」とある)

東魚「歌道の師も容色才氣に、おされてしまふのであらう。
塵山「竹柏會にも、斯る才媛が居るであらう。

(582) 三百匁出すもやくの關

省二「京大阪の間男さへ三百匁ぞかし」(亂匪三本鏡)。「かんにんをして三百匁落手する」(古川柳)。「もやく」は毛がもやく、生えて居るの謂で、紛擾の意となり又秘密裡に生じた男女の情事で、一行平様と此我等と、ちつとした、もやくが互に深うなり」(松風村雨東帯鑑)「五兩の時も七兩二分の時もあつた。(奥州街道笹谷峠にあつた關を、もやくの關とか有耶無耶關と稱した)。

東魚「銀三百で五兩なのだらう。姦通は五兩とられたので、前説例句は堪忍五兩と俗諺をかかしたものだ。
塵山「もやくの關を持出したのが、作者の大いに苦心した所であらう。

(583) 雪雲とうふの盆を胸に當

省二「雪雲だ。湯豆腐でもたべようといふ事になり、盆を胸にあて買ひに出掛ける。
東魚「一盆を胸に當りで、寒空へ買物に出かける趣がよく出てゐる。
塵山「雪を見ながら、湯豆腐で晩酌といふ寸法である。

(584) 蹴られた意趣に直切る馬市

省二「意趣返しに、大に値切つてみたところで、手は打てまい。
東魚「作爲に過ぎるやうだが、馬鹿しくしさに微笑される。
塵山「斯る句も、偶に獨笑の種となつて可い。

(585) 八乙女の一人欠たる俄照り

省二「八乙女とは神樂を奏する八人の乙女の事であるが、俄照りのために、なぜ一人缺けたのか察しがつかぬ。前句事情だらう。乙由に「八

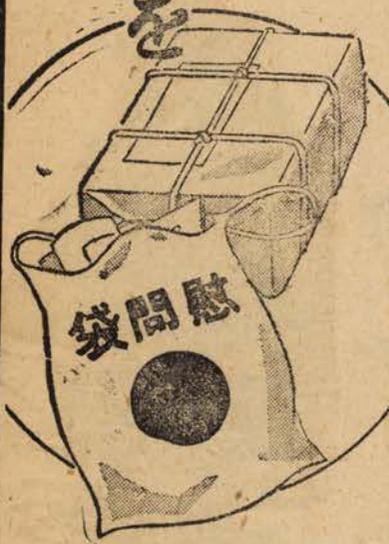
乙女も給出立や山まいり」の作がある。
東魚「一人欠けるといふ趣が、前句に照應して動かぬものとなつたのであらうが、このままでは、何んとも判断がつかぬ。
塵山「八少女は神樂の舞姫で、八人であるけれども、只一人のことも有るので、たとひ一人缺けても事は缺けぬであらう。

(586) 醫者の白にも利ときかぬと

省二「私は醫者になるべきであつたのだが、思へば斯る貧弱な顔貌では、ならなかつた事が患者に幸ひして居る。醫者の風貌態度こそは藥餌同様の功能があるであらう。
東魚「額付も信頼される、一つの道具である。
塵山「醫師はその風采に據つて、患家の信用が違ふのである。

戦線の將士へ
白衣の勇士へ

慰問品



慰問品賣場一階



實用向百貨店
松坂屋

大坂・日本橋

近作柳樽

路郎選



空閑地利用お花は隅の隅松江永澤登喜子
 月給袋動悸と帯の間なり
 額の繪が少し無粋な四疊半
 未亡人花緒も地味にし給へり
 ターキの其の後を知らず嫁にゆき
 大臣の奥さんと云ふ鼻眼鏡
 人間の夢をさげすみ豚と居る和歌山田島破鼓
 古典深奥電髪のゆらぐ午後
 戀のまゝ置かず建設急ぐ國
 洋酒ある風景壁に三國旗
 鍊成の願焦げてやゝ尖り
 この先にウラジオがあり水青し松江石田笙子
 秋は佳し笈の音を聞きながら
 こんな手もあるのか草の實のお粥
 商人道儲ける話などやめた
 冷淡な應接時計のねちをまき大阪橋本美奈子
 二列登校次の日本を背負う子等
 義理と云う言葉を知らぬ處女なりき
 コスモスが又咲きました慰問文

蝨採り方丈さんの暇な午後松江御光寺 豹
 産月をちやんと知つてる隣組
 窓開けて煙を追ひ出す善後策
 同
 でも深い足跡だつた前外相
 汽車旅行兵隊さんは子供好き神戸平川久枝
 もう燃える頃と待つてるモンベ隊
 二階がり大きな地圖がはつてあり
 宿帳は作家でいまだ二十八
 近眼の頭が邪魔な掲示板松江田中將雄
 おふくろのくどい手紙と乾蝨
 秋の椽に特輯高木百合子姫
 戸口調査同級だつた巡查来る
 生み立ての玉子尊く母の掌の尾崎山田南濃路
 闘病の哀れは頬紅つけてゐる
 物々交換まゝごと真似てゐる如し
 酢昆布が齒にはさまつて居る電話松江小田紹二
 火叩きの柄が長過る裏通
 作業帽髪のはみ出たのが女
 同

川柳・書・架 (77)

川柳警察史話

植木鬼佛著

▼本書は徳富蘇峰翁の題字、尾佐竹猛氏の序で飾られてゐる。著者の「はしがき」の一節を抜くと「警察の歴史を知るには役所の倉庫や、出版物等に資料は多いであらう。然し本書はこの類の警察史ではなく、肩の凝らない民衆詩川柳によつて、民間側から遠慮のない見方をした江戸時代より現代に至る警察の變遷史である」云々

▼目次は江戸時代篇、明治及大正時代篇、昭和時代篇の三大別に分類されてゐる(細目は略)。
 ▼昭和十六年八月十四日發行、B列6號刊、四五八頁、定價金貳圓、東京市神田區錦町一丁目十四番地松華堂書店發行。

▼著者植木鬼佛氏は川柳人であり、警察人であり、本書の刊行は全くその人を得た譯である。著者が十年の苦心の研究によつて成つたもの、良書として推薦するの躊躇しない。ただ惜しむらくは時局下の出版だけに、紙質が悪いこと、製本が粗悪であること、誤植脱字の目立つこと等である。

川柳史講話

海野夢一佛著

▼本書の巻頭には既に故人となつた岡田三面子の序文が掲げられ、次に去來亭主人の序がある。
 ▼左に凡例の一節を抜くと、



芦屋あたり流石にいいね下女が居り 姫路 小川静観堂
 秋出水なんの力が盛り上る 同
 こんなよい國はあらじな稻穂垂り 同
 チャーチルは拜み倒しに洋上へ 愛媛縣 大洲町 米澤曉明
 子を抱いた煙草風向き考へる 同
 ぶらんこの下だけおいて種を蒔き 同
 軍服へ町はあわたゞしさをまし 京都 小坂ふじ彌
 私益から離れ切れない被告席 同
 いさかひの夫婦へ白衣の人通る 同
 とは云へど戀のチケツトまでくれず 和歌山 秋月宏方
 小さい驛へふり落された様に降り 同
 政治通田舎に惜しい散髪屋 同
 洗髪をして人妻の少女めき 大阪 米田春童
 老人もルーズヴェルトへ腹を立て 同
 食へくと云ふ病人へ逆らはす 同
 體位向上大きな太い足になり 岡山 眞理子
 のりかへのりかへ大阪の雨細々と 同

兄の死を悼む
 漢口の土も踏み來し兄なるに 同
 後任はたくさんの目を背に感じ 奈良縣 王寺町 森田カズエ
 後任へ社長の秘事も引繼がれ 同
 川端で月見が出来た隣組 大阪 中西彌生
 隣組のバケツリレーで小火ですみ 同
 丸刈にしてもヒゲだけ残しとき 同
 田舎家の落着き猫のまるき背 岡山 本田ユリエ
 街はづれのこんなところに用達社 同
 承り箱 秋風の吹く軒場 同
 摸型機へ父も興味を持ちはじめ 大阪 富岡巨人
 馴れて居る職がいゝさと子澤山 同
 借用の百圓也に手が震へ 同

同じ名の子供が居つた紙芝居 松江 本庄快哉
 綽名より覚えてゐない友と遇ひ 同
 やゝあつて出て來た社長作業服 同
 髪斗不用中元不用長期戦 高橋縣 橋本町 横川美柳
 休閑地結局食へる木を植えた 同
 背の子が泣き出す朝の列にゐる 同
 列車事故どのどなたが乗つてゝか 名古屋 松井静子
 バリカンへ順に並んだ子澤山 同
 十匹の秋刀魚に列ぶ人の列 同
 寄進帳の名は出征の息子にし 松山 天搖寺 蘭
 獨眼の光り提督大使なり 同

野村外相
 見解の相違へ折れぬ巨體なり 同
 鯨カツ胡椒の効かぬ淋しさよ 西宮 谷口綠葉
 痛む齒をさぐり當てたり秋の風 同
 景氣の好いのは電車だけだと乗つてくる 同
 インテリの女將社長に負けて居ず 大阪 八竹正柳
 社交とは化せり靈柩待つ祭場 同
 御佛も飽きて御座らう長弔辭 同
 タイピスト故郷へ無沙汰の文字も打ち 松江 村上光緒
 うちの子が謝々と禮を言ひました 同
 時間です店は無情な幕を吊り 同

上 京
 蠅にして見れば思はぬ驛につき 大阪 松浦帆船
 チト鞍に自信駆足させるなり 同
 君よ征け月も圓かに送るなり 同
 六疊の一開子が泣き子が笑ひ 愛媛縣 角野町 在間小樓
 傘借りて歸る夜業の疲れやう 同
 凱旋門世紀の兵となり進む 同
 榮轉は父轉校の子は淋し 松江 吉岡遅兒
 煙突の高さも長屋よく揃ひ 同
 肉體美只それだけの嫁が來る 同

一、從來、俳諧史は公刊せられても、川柳史の公刊せらるゝものはなく、會々川柳史のものも有つても、初世川柳關係の一部にとゞまるに過ぎない。是は單に學究的の立場にある者が、明治以降の生きた川柳史を知らぬのと、狂句時代を輕視してゐるからである。今日の川柳を知らんとすれば、狂句時代、新川柳發祥時代を知らずして、よく新川柳を語る事は出来ない筈である。斯うした見地から、本書に夫れを概説したのであつて、以つて大川柳史完成の礎稿ともなれば幸甚である。云々

▼目次概要を掲げれば第一章前説、第二章前附の發祥、第三章川柳の一生、第四章柳井家三代、第五章狂句に轉向、第六章新川柳勃興、第七章各地の展望、第八章句の變遷梗概、第九章川柳を語るの九章に分類され、附録として川柳略年表が掲載されてある。

▼昭和十年二月廿五日發行、四六版三九〇頁、定價二圓二十錢
 東京市小石川區江戸町十八番地交關社發行

▼著者は東都の一川柳人である。川柳史はもつと早く刊行されなければならぬものであるが、著者の言の如く、狂句時代の輕視から明治以後の川柳に對して學究的立場の人々が、よく知らないといふことのために刊行されなかつたのである。著者の多大な努力を以てしても、明治以後の川柳に對しては多くの誤謬と、隨所に研究の足らざるを思はされるものがある。著者が大川柳史の礎稿ともなれば幸甚である、凡例を結んでゐる如く更に第二第三の川柳史に筆を染める人の出づることを期待したい。



名月へ敵も夜襲を控へたか南支 米谷松太樓

録音のほしい便りを書き續け 同

千人針死線を越えた色でなし 同

煙囪で覗かれそうな便り書く 同

おちふれて今日は歌舞伎の櫻席 兵庫縣 魚崎町 谷口寒草

土瓶むし飲まねばならぬ秋と知る 同

女醫若し患者に惚れて了ひさう 同

大阪の水をほめてる水仕事 大阪 山川富士

休閑地節米になるものを植え 同

腕白は肩章等もよく覺え下 關 多田海郎

主婦常會遅刻口上長々と 同

資源愛護封筒返す給料日 松本 西藤義春

小さくも相續人だ子は強し 同

ラツシユアワードうぞお先へ乗遅れ 大阪 中島晚成

實驗に教師理論と喰ひ違ひ 同

母性愛女辯護士半ば泣き 布施 岩本晴美

責任を果す日待つ消火彈 同

アパートのタンスは何處へおきましよう 大阪 後藤和坊

申譯ないど鐵道省調査に來 同

曼珠沙華こゝから僕の村の道 名古屋 八幡勿來

發車までに間に合す氣の厚生車 同

何時出來る都市計劃に枯れかゝり 高根縣 横田町 新出谷一聲

ワンピース男の下駄で米をとぎ 同

初めてのやうな顔して話しかけ 加味島 正文文女

あの顔がどんな無心も説きつける 同

商人としての意見ものべてゆき 松江 村上四希

番傘を持つ手に光る傷痕章 同

若き背に感じをんなを追ひ越しぬ 松本 川上遼二

くちびるをも一度なめて宵の嘘 同

母病む 同

病む母の氣強く征きし兄呼ばず 大阪 山本葉光

汲み置きの水にも秋の水枕 同

轉業でせめて國家へ御奉公 廣島縣 竹原町 杉原愛鳩

貯金額社の一番は女事務 同

公定價月賦屋やはり店を開け 大阪 有馬千斗

ちと早い辨當景の好いところ 同

卒業の日からソフトを買つて來る 神戸 市川治男

急行の市電間抜けた顔に風 同

應召に女すべてを許したり石見 田中 弘樓

何か御用ですかと娘の冷たさ 同

命日へ故人の好きな酒もなく 大阪 菅 平行

廣告へ病人の氣がまた變り 同

お前もか俺もとはすむ丸坊主 大阪 野元吐空

オカツバに秋風強き休閑地 同

お役所へ行つた氣持で物を買ひ 豊中 下山成兒

來客が來てもニュースを切らさない 同

よく疎々四十女の多辯なり 大阪 浪花駒志希

マツチ二度擦つたりおそい料理待つ 同

姉さんは先に歸れと金くれた 大阪 平井流舟

召され征く身なれど母の手の白さ 同

覺悟とは別な故郷の夢を見た 満洲 和久洞人

滿洲の廣さ見渡す野戰風呂 同

齋藤瀏先生 尿槽を抱へて閣下一首詠み 大阪 南 要兒

戀もなくたゞ忠節の二字と征く 同

エノケンに似た顔案山子唄いそう 岡山 佐伯鷄城

轉業へ財布の紐が長過ぎる 同

食客も二合三勺喰ふて寝る 大阪 榊岡詩朗

國訛り出すも墓參の道すがら 同

陰膳へ寫眞倒れて半笑ひ 大阪 か ずゑ

タイムレコーダー設置さる すべりこみ一息ついてあたりをみ 同

廿世紀谷の清水にうかしとき 大阪 村治紫津

湯屋の出来事

大山露斗

神経痛で今日二度目の湯屋へぶらりと來た。某氏が湯から出て一服喫ふて、ふと見ると、純綿の手拭が行方不明だ。あれ／＼と尋ねてゐるの、四五人出て來て、俺のズボンが無い、一人は財布が無い、續いて兵古帯紛失といふ騒ぎ。番臺氏に訊くと、今ハツビを被た人が出ましたが、あれがあやしい。それと云ふので、外の五本人が後を追跡したところ、悪運つきたか、二十分程のち、風呂客の追手に同行されて、戻つて來た。某氏が警官の形で取調べに當る。先づ姓名を訊くと、素直に答へる。側の一人が犯人の下駄を見る。これも裏に名前があつて失敬物とわかる。同じくズボンが失敬物。同じく帯も失敬物。手拭を盗られた訊問をしてゐた某氏が「お前、なんぼ困つても、人の物を奪るとはいかんぞ」と、たしなめると、「どうも濟みません」と、盗人が答へる。「みなに、こらえて貰うてやるから、どこへなと去になさい。手拭はお前にやるから」と盗人に追銭すると、泥さんい、氣になつて「すみませんが煙草を一本下さい」との要求に、二三本某氏が寄附につく。煙草も貰ひ、手拭を腰に、秋風の吹く町へ、世の人の情に頭をさけて、一本のきんしへ、ゆう／＼火をつけて隣り町の方へ出て行つたが、あとで聞くと隣り町の飯舖屋でうどんの二杯目で捕つたとのこと。



空瓶をづらりならべて酒屋暇 愛媛縣 大洲町 武田京司
 ステツキが老後の趣味に一つふえ 同
 禁酒を誓つて二女を又しずめ 大阪 保田呆人
 使はれて満足であり布衣の我 同
 お百度に日本の母の強さ見る 大阪 谷崎一昌
 つゝましさを五階の窓へ禮をする 同
 建設へ日華の若い汗と血が 北支 宇敷桃水
 秋風が露人へ寒いクレムリン 同
 四千年墓地かくまでに多くあり 神奈川 尾崎緑柳
 クリークに泳ぐ魚あり無心に見入る 同
 胸張つて見ても現役とは見えず 鳥取縣 岡崎祥月
 稻は伸び作物は出来遣兒は育ち 同
 御佛も千年過ぎた光りやう 奈良縣 主寺町 森田カズエ
 佛像の母に似てるが親しまれ 同
 走れ〜米食時間が切れさうだ 大阪 久保子紋

ゲームセツト

挨拶へ外野の一人遅れて來 同
 こゝいらでへたばつてやれ馬の智慧 大阪 金子正一朗
 風前の灯鉦のフーラフラ 同
 看板の通りの品はありません 松山 沖原縁風
 臨戦下もうはりきつて二十一 大阪 武部香林坊
 子が泣けば泣いたで又も内輪揉め 大牟田 平島平人
 胃療撃俺の我慢を臥せつける 大牟田 富田一葉
 月冴えて〜泥塗る鐵兜 滿洲 塚崎政一郎
 電髪も女にかへり花を切り 愛媛縣 木村棟友
 慰問熱娘仲間在花が咲き 大阪 古川鶴聲
 ひつそりとして別荘に下女一人 松江 恒松町紅
 女房の顔色見つゝ差す將棋 加味島 岡村眞茂留
 健康美誇る翼賛の顔の艶 加味島 西井兎月
 高いとは知りつゝ顔で買はされる 加味島 西居吐夢

地位と金揃へて惜しい顔を持ち 加味島 井芹翠緑
 映畫館いつもの席は顔馴染 加味島 古屋溪畔
 初舞臺顔馴染へちとあわて 加味島 佐田俣笛
 パラソルのつゞくお寺は護摩供養 加味島 宮崎呂山
 己が顔ばかり昔の儘であり 加味島 朝岡千代榮
 踏臺にされる覺悟で顔を貸し 加味島 徳永白川
 陽炎の中へ吸はれて行くモモナ 加味島 堀川筑泉
 漁夫の背羅漢に似てる暑い演 加味島 横田蕪子
 發車ベルけたましくも雨になり 大阪 橋口松嵐

未入營補充兵教育

突撃の氣迫は先祖譲りなり 布施 上田翠光
 ニヤンはまけとけだけはよく判り 奉天 吉田文女
 階級へものを言はして居る若さ 尼崎 山下秀峰
 飯盒へいがのまんまの栗入れて 大阪 桃木競舟
 水漬にカンカン帽のお年寄り 大阪 松永青雲

三汀君を弔ふ

君と僕喧嘩もせずに別れたか 高松 楊柳夢
 鬱憤は路傍の石を遠く蹴る 大阪 宮田不二
 せきたてる様に妊娠尋ねられ 大阪 佐野牛歩
 歩け〜堂ビル前の出勤時 大阪 藤森小雅子
 代書するその手の爪は伸びてゐた 京都 奥田杜的
 満員車子どもの帽子なくさされ 尼崎 奥田縁翠
 管制の夜をどこやらで蟲の聲 館山 山木幸一
 俺とこの娘やろかと伯父が來る 廣島 大山露斗
 内地での望み戦野に咲かせるぞ 大阪 朝田章
 上は名月だとさ地下鐵改札員 大阪 久保子紋
 松茸の匂ひ内地の有難し 大阪 松下小柳子
 陣中に祖國と同じ虫が鳴き 伊丹 岩井泉
 一元化古い暖簾も巾きかず 諏訪 牛山臥牛

健全漫畫雜誌

大阪ツッパ

月刊

價 二〇錢
送 一錢
全國ノ書店
賣店ニアリ

發行所

輝文館

大阪市東區橫堀二
振替大阪二六四番

★ 談 愚 ★

浪 由 自 烟 小

解 剖

満座の中でオナラの濡衣を着せられた彼女は、ハイヤーをとばして我家に駈戻るなり「あたしをみなさんの前で解剖して頂だい」と、外科醫なる父の膝に泣きくづれた。

決 議

吾等が食糧確保の爲、各戸に猫を飼つて鼠を退治ることにした。

女 猫

傷だらけの頬を抱へて「猫にやられた」と駈込んで来たおつさんだつたので、「そんな猫ならぶち殺してしまひなすつては」と、薬局の大將が絆創膏を渡しながら、「サーピスのつもりで云うと、一人の嬢やと思うてあんまり馬鹿にすなひ」と、おつさんが絆創膏を投つけて怒り出した。



國 語 卷 七 の

川 柳 點 に 就 て

石 曾 根 民 郎

茶の人生感に溢れた奇智に若い血潮をたぎらせた。私は非常に優柔不斷な中學生であつた。蕪村の藝術派たる典型を絢爛措くところを知らざる發句によつて味はつてゐた。蕪村と子規の關係もその頃つとめて知るやうに讀書したのである。

從つて四年生になつてから川柳と俳句の差違に關し疑惑を抱くことを覺え、同じ十七文字の川柳と俳句に如何なる精神と内容の區別を求めねばならぬかを考へた。そして知るべく自分で書物を漁つた。これが川柳と私の中學四年生に纏はるイメージである。

さて岩波編輯部編「國語」卷七の川柳點の第一句から始めてゆかう。先づこの「川柳點」の點とは如何なることを指すかといふ問題はいづれ他の機會で詳述することにして、いち早く古川柳の評釋に就て考へたい。この教科書を使つておられる中等學生は、宜しく虎の巻として私の文を切抜き、教師を驚かす明答の榮になれば何よりの仕合せであり、また一般の方々古川柳のふかふかした味の豊饒と共に掬めども盡せぬ人生のありがたさを詠み得る古川柳——そして

現に私たちが向上につとめる現代川柳の精神的意義を認識せらるゝことを切望して止まぬものである。

かみなりをまねて腹掛や
つとさせ

眞夏、眞裸になつた子供にやうやくのことで腹掛けをさせたといふので、之れも並大抵な叱言ではないふことを聞かぬ。そんな恰好してゐると雷さんが臍をとるから早く〜と驚かせ、何とか、かんとか腹掛を當てさせたのである。親と子の人情があふれてゐる。

男の子裸にするとかま
らず
ぬがせると腹をたゝいて
小僧にけ
目をねむつてる内腹掛け
をしめす

この三つの類句はそれ／＼悪戯盛りの子供の眞裸を詠んだものであり、第三句は誘ひ込むやうにして腹掛けを子供自身の手でやらせるべく躰をよくしたい氣持ちが出てゐると思ふ。原句の、かみなりを眞似たといふその臍に就ては古來雷様は臍を取るといふ習慣化した私たちの傳承であるが、雷と臍に關する文献はな

良心

一年生から六年間、先生の受持つて來られた學級に、先生の御息がおいでになりました、其の御息が、此の度中學校の入學試験に、見事に落第されました。

先生は始めてほつとした様に、これで妾が如何に公平無私であつたかが、父兄の方々に、よくわかつていただけると、おつしやいました。

研究

夜毎がりくぐくと、鼠が囀る長持のズミを削り取つて其榮養價値を、眞面目に研究して見た學者があつた。

れんげ草

廓一番の流行りつ妓を、大枚を投じて落籍して、悦に入る間もなく二三ヶ月間すると煤けきつて、女房と些も變りがない。

且那は馬鹿らしくなつて打ちちらかしておくと、其女が又廓へ出て、御光がさす様な女に成つた。

且那は又あわて、以前の三倍からの大枚を投じて落籍した。

かゝるに興味深く、多くを語り得る資料を私も蒐めてあるけれども、こゝではそれを語らうとするには、雷様と臍の關係が好色的方面に延びてゆかうとも限らぬので、中學生に對して如何かと思ひ、遺憾ながら筆を折つて次の句に轉じて見よう。

道間へは一度に動く田植

田園風景で最も身近な感情に觸れてくる句である。些か俳味を帯びた古川柳と見る人もあるが、かういつた傾向の句も、なべて川柳の範疇に含まれるのは當然でありすぎ。

早種算數へて下る峠道

ひどい風田植の笠に指の

ある
早乙女の尻から濡れる俄

類句として擧げた三句と照合して、田植行事の並々ならぬ農士の御辛勞を深謝したい。

本ぶりに成つて出て行く

軒下などに佇んで晴れるのを待つてゐたのに、愈々地雨となつて來て止みそうにもない。いつそあきらめてすごす

ご濡れて行く後姿のあはれさこんなことならとつくに出かけるのだつたに。本ぶりになつて却つて濡れてゆく矛盾を詠んだところに妙味がある。柳樽拾遺の冬季の部に載つてゐる句だから、この雨は降りみ降らずみの時雨空と見る人もあらうけれど、一句立としては時雨とのみこだはる筈もなく、夕立にもとれる句であつて雨やどりの類句には

入りもせぬ物の値をきく
雨やどり
思ひきる姿の出来る雨やどり
お前がた本ぶりだよと邪魔がられ

祭から戻ると連れれた子をくばり

近所の子供を幾人も連れて祭見物に行つての歸り、それ／＼子供を家々に送り届けるのである。「子をくばり」がこの句の勘所で、作者の凡手ならざるを窺ひ知れるといふものであらう。氣易く子供を預かつて發見物に赴くひとの、子供好きな面貌をそれとなく寫し得て輕快である。

祭の子笑つて通る内の前
お祭に出たのを下女はきつみみ

借物と見たはひが目か金屏風

第二句の「きつみみそ」は大變な自慢といつた意味で、第三句は古い川柳獨得の辛辣な批判眼のさせるわざである。

生きもの、やうにとらへるところでん

石花菜を煮て漉し或は寒天を煮溶かして冷し固めて、これに細長い箱の口に金網を張り一方より突き出し、酢醬油をかけて食する夏の清涼食物を心太といふ。

一方から突出される心太の恰好が、によろ／＼として全く生きものの如くに思はれる心太つきのめされてかしこまり

針金をのめくつて出る心太

の類句に示すやうに、江戸時代に於てはこれを賣る商人があつたわけで「守貞漫稿」には心太賣が細長い箱の口の一方を突出してゐる圖様が掲げられ、これを見ると心太賣の賣聲も聞えさうな氣がする。

うた、寝の枕四五冊引ぬかれ

本を枕にうたゝ寝してゐたが、その本が入用になつた別のひとの手で四五冊引抜かれたといふのである。よくありさうな事態だ。

うた、ねの顔へ一冊屋根にふき

うた、ねの書物は風が繰つてゐる

うた、ねを繪に書く時は本をもち

團扇賣りの如才のないところが示されて、自分で一度扇いでから人の氣をさそふやうに出して見せる。「繪も飛切奇抜だし骨の具合がいゝですどうです。ひとつお買ひになりませんか」さういふのである。そこが商人の癖で、この句はまさしく見通してゐない。

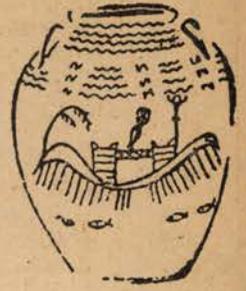
うちわではにくらしい程たゝかれず

團扇を詠つた古川柳ではこの句は傑作で、人生の機微をうがつてゐて私の好きな句だ。「團扇賣」の句よりすと傑れ、勝負にならぬ。たゞこの「にくらしい程」の句の評釋が學生に迷惑を掛けると悪いから、大人になつてから

うた、寝の枕四五冊引ぬかれ

うた、寝の枕四五冊引ぬかれ

うた、寝の枕四五冊引ぬかれ



川柳想の人

安川久留美

書の蚊をうしろに隠す佛
かな 小林 一茶

叩かれて書蚊を吐く木
魚かな 夏目 漱石

一茶は明和に生れて文政に逝去し、漱石は明治に生れて大正に幽明境を異にした、孰れも故人であるが、時代に自分の隔りがあるが、この作句を對照すると其着想並に表現にさのみ變りがない。この際佛も木魚も蚊に取つては大慈大悲といひたい場面である。

一茶は知らず、寫眞で見る五高教師時代の漱石氏の顔にもどこやら皮肉相が漂うてゐるやうに思ふ。

蠶螂や五分の魂是れ見よ
と 一茶

蠶螂の何を以てか立腹す
漱石

斯う並べて見ると二人は時代こそちがへ同じ性格をもつてゐたやうにも思はれる。老ひて信州の隠れ家に棲んだ一

しみん、味はつて貰ふべく、將來の宿題としておかう。大人になればおのづから會心の微笑をもらし、そして古川柳の潤澤な人生感情の極地を觸れ得ること、信ずるものである。

おさへればはず、きはなせ
はきりぎりす

さきりぎりす捕りの實況である。鳴聲を目當てにたしかに押へたと思つて、芒をかきわけてみたのに、これはどうしたことであらう。虫のありかがわからぬ。すつかり手を放したら、思はぬところからさきりぎりすが飛出してきた。私はかう句譯してみる。俳句では到底詠ひ得ないところを擱んでゐる。古川柳のうちでも修辭的にこなされた名句である。秋のこまやかな氣風に觸れてすがすがしい。

芒刈る鎌三日月の見えか
くれ

生統の一日絶えぬ世賣
このふたつの類句の直情的だけで深みのない句より、すつと詩性に恵まれてゐる私の好きな句である。

手紙には狸臺には鯉をの
せ

狸窟つばい句である。作句見本には何としてもつまらぬ。現代川柳を創作しやうとする人は、この手法を眞似てはもうお終ひだ。古川柳の典型として見るだけにとどめておかう。

手紙の文句の書き違ひを衝いたもので、進物の附手紙には一狸進上仕候間御受納相成度候」とあるから、狸など貰つてどうしたらよからうと心配して、臺の上を見ると、これは何んと、鯉であつたといふだけである。ケモノ扁とサカナ扁の書き間違ひで、いさゝか年寄りじみた句だ。川柳といふものがあやまられるおそれのある句であつて、かうした句があちらでもこちらでも面白がつてゐたんでは、所詮川柳の本質を擱まれない。寒心させられる句として辟易しておく。

通りぬけ無用で通りぬけ
が知れ

一通りぬけ無用」と貼紙をしてあるところに限つて通りぬけの出来ることを意味してゐるといふのである。それをまたそのやうに見ぬく爛眼のある街の者にも些か困る。一

小便無用」の塀には決して地

物線を引かぬことである。呵々

義貞の勢はあさりを踏み
つぶし

詠史川柳。吉野朝時代の新田義貞。

一族郎黨を集め二萬餘騎を引連れて、一據鎌倉を突かんと稻村ヶ崎に來たが、滿潮で前進不可能である。まして敵は海上四五町の所に大船を浮べ横矢を射んと構へてゐる。そこで義貞は龍神に祈り自ら佩いてゐた金作の太刀を海中に捧げ、干潮を冀つたところ龍神御受納あつて忽ち二十餘町の干潟となつたので、諸軍を合して六萬騎、「それ」とばかりに鎌倉さして亂れ入つた際、鎌倉方の周章狼狽はいふまでもないが、それよりもこの潮の引いたところを棲處にして居た淺蜷貝であつたらう。川柳子獨得の着眼點である。大軍の襲來と淺蜷貝といふ小さなものとの對比にまで及ぼすことは、この句釋をする人の好向によるものであつて、そこまで考へ伸ばす必要はないであらう。

海までが云ふなりになる運のつき
義貞の上卒あらめてつん

のめり

夜が明けて狩場狩場へ外
科を呼び

曾我兄弟敵討の翌朝。兄の祐成は二十二歳、弟の時致は二十歳父祐泰が無念の最期をなしてから十七星霜も過ぎて居る。建長四年右大將源頼朝が關八州の武士を集めて富士の裾野で牧狩を催すことを知り、好機逸すべからずと誓ひ合つた曾我兄弟は首尾よく工藤祐經を討取り本懐を遂げた五月二十八日のこと。

曾我兄弟の獅子奮迅の快刀に驚るゝもの多數のためその翌朝は狩場狩場へ外科醫をよんで治療に赴かせたといふ句本望は松明で見る寝顔な
り
猪やむじなのわきで王藤
死に

清盛の醫者ははたかで飯
をと

「平家物語」にいふ。「入道相國病付給へる日よりして湯水も咽へ入れられず。身の内の熱き事は火を燒くが如し臥し給へる所四五間が内へ入る者は、熱さ堪へがたし。只宜ふ事とてはあたあたとはかりなり。誠に只事とも見え給

茶と創作に閉ぢ籠る時、自宅架設電話の受話機をはずしてあつたと傳へる漱石氏と相通する點を見出ださせるではないか。だから、句に諷刺をにがさない漱石氏は「明治の一茶」といふ感じがしてならない。漱石（俳人としての）氏は必ず一茶といふ人物に憧憬をもつてゐた事であらふ。

董ほどの小さき人に生れ
たし

の句は漱石の穿つた主観であり

冬枯にどちが先立つ草の
花

の句は一茶の無常迅速観である。

合本

「川柳雜誌」十七卷の合本が出来てゐます。大型の上製で背には SENRYU ZASSHI. VOL. XVII の文字が美しく輝いてゐます。

あなたの書棚に一冊如何です。尤も僅の部数しかありませんから御希望の方は大至急御注文下さい。（一冊前金四圓三〇銭）川柳雜誌「菊版時代の合本」では三卷、四卷、五卷、六卷、七卷、八卷、九卷、十卷、十二卷、十三卷、十四卷があります（定価各三圓、送料三〇銭）振替大阪七五〇五〇（川柳雜誌社）を利用して下さい。

はす餘りの堪へ難さにや、比叡山より、千手井の水を汲下し石の船に堪へ、其に下りて寒え給へば、水夥しう湧き上つて程なく湯にぞ成にける。若しやと笈の水を任すれば、石や鐵などの焼けたる様に、水迸つて寄付かず。自ら中る水は焰と成つて燃えければ、黒煙殿中に充ち満ちて、炎渦巻いてぞ揚がりける」と。
平清盛は火の病で死んだとある傳説による句である。類句にも

清盛の御符はまといを書いてはり
湯に這入る時清盛はジュウといひ

そのくらさ早太櫻につつか、り

丑の刻頃に東三條の森の方から黒雲が来る。有驗の高僧が大法秘法を修せられたけれどそのきゝめがなく、遂に弓の上手な者に射留めしめることに相談が一致し源頼政を選任した。頼政は家來の猪早太を連れて待つてゐると、丑の刻頃、果して黒雲のなかに怪しきものを認めたので、あやまたず弓の矢をひようと放つた。たしかに落ちて来たものをみると、頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎のやうで鳴

聲はぬえに似てゐる怪物であつた。

そのときの光景を詠んだもので、この櫻は有名な左近の橋、右近の櫻の、あの右近の櫻を示すのも勿論である。

あの雲かさん候と早太いひ
猪の早太齋をむき出して
おどされる

喰ひますかなどと文王を
はへ寄り

支那の史話である。

齊の呂尙は困窮して老年になつて、釣で生計を立てゝゐたが、あるとき周の渭水といふ川の北で、眞直ぐな針で釣をしてゐると、偶々狩獵に出てゐた文王に遇つた。その文王が「魚は釣れますか」といつて傍へ寄つて來たのである。文王は呂尙の大人物であることを看破し「我が太公子を望むこと久し」と、自分の車に載せて歸り、押し立て、師と爲し、太公望と呼んだ。釣人を太公望と稱するのこゝから來てゐるのである。

文王問ふてのたまはく喰ひます
針も心も眞直ぐな釣人なり

(了)

化膿症

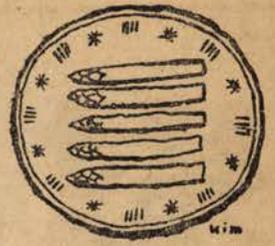
效奏期短・服内

- 中耳炎
- 扁桃腺炎
- 淋疾
- 化膿性婦人科疾患
- 皮膚化膿
- 盲腸炎

アバシル錠

製通復元 山之内藥商品會 東京・大阪

包錠 二十錠 五十錠 百錠



七人句評

山雨樓(横濱) 久米雄(廣島)
 市多樓(下關) 風來子(廣島)
 九坡(岡山) 灯竿(岡山)
 伯峯(廣島)

ニユースを切つて常會へ
 出かけたなり 春 集

味に乏しい句だ。
 朝星夜星めぐまれてあす

露 斗

灯竿〓この句は二通りの意味を考へさせられる。「新聞に常會の記事が出てゐる、参考に切り抜いて常會に出席した」といふ解釋と「常會の開會時刻が近づいたので時間勵行の建前から惜しいところラヂオニユースのスキツチを切つた」といふ氣持も表現されてゐる。前者は常會に對して大いに關心を持ち、細心の注意が拂はれてゐる事が察せられ、後者はともすれば遅れ勝ちの常會の時刻に遅れまいとする美しい心を表したものと解される。何れが春集さんの氣持か断定は出来ないが、何れにしても、新體制下の今日川柳としてこのやうな句を見るのは嬉しいことである。

久米雄〓私は灯竿さんの後者に取りたい。新聞に常會の記事が出てゐたのを切り取るとは想像しない方がいゝと思ひます。それにしてもあまり深味がないやうです。想としてはうなづけますが。
 山雨樓〓ラヂオのニユースを開くのを打切つて常會へ馳せ付けたと云ふのであらう。あまりに生活に即し過ぎ、敘述に正直一點張りて大した感興を呼ばない。所謂詩

九坡〓この句の表面に表れてゐる感情は、あるひは自嘲の意とも解せられませうが、別の意味で悪まれてゐない人生に徹してゐるとも云ふか、醜い野心や欺瞞に満ちた人生の裏側で黙々として働きのながら尙物質的に恵まれてゐない境遇にある人があらゆる不平や野心を捨て去つて、その不遇に甘んじつゝ生きて行くといふ何かしら諦めにも似た心境を表現したものと考へられる。
 風來子〓朝星夜星を見上げて浮んだ心境でしょうが、めぐまれてゐずと否定して置きながらかへつて作者の心は満ち足りてゐるやうな氣持がこの句の生命だと思ひます。
 市多樓〓この作者は自分と云ふ者を餘りにも卑下し過ぎてゐるやうに思ひます。
 伯峯〓この句を拜見した時啄木の「御けど……じつと手を見る」の歌を聯想しました。底を流れるものに一脈のつながりがあるのではなないでせうか。清貧に甘んじながらも矢張り一生懸命に働かねばならぬ人生。一種の諦観かも知れませ

んが、作者の心情に切々たる愛情を感じます。
 山雨樓〓提出者がこの句の詠觀的表現を認めてゐることは一應肯けるが、敘法が主觀的なのでどうも弱味があつて面白くない。
 戯れにまた出て来たかお
 月樓 松太樓
 風來子〓この句は南支にあつて千軍萬馬を往來された詭武者の尊い記録であり現地報告です。戦の暇に或は突撃の寸暇を惜しんで夜空に浮び出た月を眺める程兵隊の心を描へるものはないでせう。
 九坡〓こゝには突撃の雄叫びもなく、銃弾の響も聞えないが、而も平凡なお月様を描へて靜かな戦陣の一ときが美事に表現されてゐる。ともすれば胸に湧くであらう郷愁を振り捨てやうとする兵隊の露らざる感慨を描いた異色ある陣中吟であると思ひます。
 市多樓〓陣中吟ですね。面白い句と思ひます。戯れに出たお月様とは日本兵の意氣既に敵を呑んでゐるといふ氣持が表れてゐるやうに思はれます。
 山雨樓〓「また出て来た」の「また」など餘り意味のない表現ではなからうか。同じ作者の「銃聲を聞かず禰よく乾き」の方が其のユーモアと共に現地の息吹をより多く傳へてゐるものと思ふ。
 歩けり子のヨチノクニ
 棟 友
 市多樓〓この句は最後の總が、りて生きて居り、親としての肉身としての心理がよく表れてゐる。歩けりノに對して子のヨチノクといふ表現は總が、りの場を特に面白く表してゐる。



同舟近詠

松山 前田 五健

長生のめたさ鶴の老松の
 長さよ御製に民の末までも
 菊の呼吸そらを拂ひ清めたり
 何か云ひそに觀音様の俯眼なる
 子規居士も貧乏だつた古手紙
 度強い眼鏡へ朝の蝗とび
 砂利少しふんで市長の靴光る
 茜雲知事鉢巻をしめて見る
 御影町 長崎 柳 秀
 どちらからとも無く折れて夫婦ゐる
 服脱いで我が身にかへる軍需工
 母の齡モンベいさゝか奇抜めき
 小火消してまあよかつたと隣組
 生きてゐる丈けでよいとは親心
 神戸 潮田 明 坊
 關西線旅行
 稻雀あれあの塔が法隆寺
 幕 論
 中興の祖といふ墓を撫でゝみる
 衝立のうちの留守の新事務所
 繪馬堂に明治の名譽古くなり
 むさんここに喫つてばかりのひとり旅
 今治 長野 文 庫
 權幕の荒い八百屋と思へども
 新任の第一聲は御謙遜
 科學する子供の仕事根まで堀り

伯峯 微笑ましい家庭風景です
ね。歩け、ヨチ、と疊句を
使つてゐるのが面白い。

九城 微笑ましい雲圍氣はよく
分りますが、それ以外に別に申し
上げることもない様です。

山雨樓 着想が陳腐である。作
者として假令新鮮な感懐であつて
も既に詠み古された句境である場
合は、潔く練り直すべきである。
總掛りといふ表現では一浪氏の句
「總掛りやつと赤子の爪を切り」
が面白いと思つた。

人間のかなじさ今日もよ
く喋り 利生

伯峯 一體「言葉」は人間にの
み與へられた特權でありそれ故に
また宿命的なかなじさがあるのだ
す。この句から饒舌家の悲哀と云
つたものをしみじみ感じさせられ
ますが。

九坡 無意味に喋り疲れた人間
の感傷ですね。一體人間である以
上何か喋らざるを得ぬと思へば、
成る程この句は確かに宿命的な悲
哀を奏でゝゐます。
山雨樓 一寸大まかな句である
饒舌の悲哀といつたものを自嘲的

な意味で表白されてゐるのが受取
れる。だが、句想に稍々觀念的な
嫌ひがあるやうだ。同時に又詠嘆
的な感傷に走つてゐるやうにも思
ふ。

目をとちよ目をとちよ目
の中に童話 某人

山雨樓 この句を誦してゐると
何かしら句に張りがあつて調子の
高いものに觸ることが出来る。
これは詩的に昂揚された精神が迫
つて来るからである。疊み言葉の
命令體が少しの壓迫を感ずること
なしに、素直に入受れることが出
来る。某人氏の句境としては確かに
注目すべき一轉機を示したものと
思ふ。「目の中に童話」の齣は月
の中に兎の餅搗きと云つたやうな
所謂兒童文學的な甘さが感じられ
ないでもないが、それは某人氏の
持つ人生觀のあらはれであつて云
はゞこの句自體が作者の人生觀を
物語つてゐるものと云ふことが出
来る。船美氏に「君雲を語る心に
脈通ずるものがあつたが「目
をとちよ」の方はその表現技巧に
おいて鑿の入れ方が深いので句の

持つ含みが多いやうだ。僕は近頃
句評の中で「教へられる句」と云
ふことをしばしば云つてゐるが、
この句なども確かに何物かを教へ
てくれるやうだ。

灯竿 主觀的には相當深い考へ
があるかも知れないが客觀的には
どうも作者の核心に觸れたと思へ
るところまで我々の感じとは及ばぬ
やうに思へる。自分としては此の
句の持つ内容には相當に豊富なも
のがありそうに感ぜられるが、何
だか臆臆として目の中に浮ぶ童話
のやうにも感ぜられる。

久米雄 山雨樓氏のお説に盡き
てゐます。繁雜な世の中にゐる我
々は時には理想に耽りながら、過
去を反省し、將來を目論む位の餘
裕があつて欲しいと思ひます。雜
多な世の中だけに、目をつむつた
ところで美しい、和やかなパノラ
マばかし浮んで來ないでしよう。
暗い反面もあれば惨めな場面もあ
るでしよう。その中で暗い部分は
打消してしまひたい。そして明る
い方面に聯想を加へて行くやうに
したい。この童話といふのは廣い
意味の美しい、たのしい場面と取
りたいと思ひます。(了)

線の勇士へ

利子丈けで食へなくなつた赤い屋根
落葉にも似て二本目の齒が抜ける
名古屋 鈴木可香
體操の手がかち合ふも嬉しくて
松江 勝谷山川兒
趣味の話になり常會終りなり
孝行を北支の果の果からし
佛印かソ満か支那か生きてるか
額の字が讀めない妻の實家なり
塵籠の位置も子のない夫婦なり
六十の戀心ありにぎりずし
血壓の話ピールをぼんと抜き
奈良縣 嶋田翠峯
四十の聲にあわて、どうする氣
山口縣 三原狂路
訓練がすめばモンベはしまはれる
防空壕使はぬうちに草が枯れ
仁川 池田可宵
干すおしめ誰はばからぬ男の子
遊ぶ脊廣を眺へたのは昔なり
歸鮮して
副班長の報告を聞く旅歸り

慰

問

袋

を



大鐵百貨店

さ
つ
と
喜
ば
る



川協の★

★川柳人協會々長藤生路郎氏は十月六日不朽洞會員鈴木石鹿氏同伴姫路陸軍病院へ白衣勇士を慰問された。

★石崎柳石氏(廣島)は川柳研究の傍ら學園報國隊結成以來その一員として日夜多忙な日を送つて居られるが、十月七日廣島文理科大學で開催された國語國文學會研究發表會に於いて古川柳の研究法に就てと題する八項目からなる研究論文を發表多大の賞讃を博された。

★臺灣川柳社では初代川柳忌全島川柳大會を九月二十三日臺北市公會堂に於いて開催された。

★東亞川柳新東京支部では初代川忌句會を九月二十三日に催された。

★川柳社(東京)では百句集出版記念句會を十月八日午後六時より朝日俱樂部で開催された。
★大島瀧明氏(滿洲)は九月末蒙古方面を旅行された。

曠原にラマを信じて包平和 瀧明

★秋月宏方氏(和歌山)は同地で同志を集めて小集を開きたい希望をもつてゐられるので、同地方の柳人は今福一二八の同氏宛に柳信を送つていただきたい。同氏は藤生路郎師選の日日柳壇の出身で路郎師の選句を煩はしてからこの十月十日で滿二十一年にられるそうだ。

★高山武士氏(臺中)は予ねて病氣御療養中の處、この程全快、無事退院された。今後川柳に猛精進するとの便りがあつた。

★正木琴舟氏(青島)は九月下旬旅行社の團體で支那名山の一つである泰山の絶勝を探られた由。

★九月廿九日、仁川の池田可甞氏を興安丸に迎へた櫻川不水、多田市多樓、國弘半休の諸氏は柳談に花を咲かした由。

★臺中川柳會(臺灣)は、臺灣のよき川柳機關として華々しき活躍を見せられてゐられたが、今回都合により十、十一、十二の三月、例會を休會されることになつた。但し毎月十六日開催の川柳研究會は従前通り實行される由。

★大井正夫氏(新京)は十月六日京城を訪問、朝鮮川柳句會に出席された由。
★横濱川柳俱樂部では聖戰に散華した故石島紅石の滿三周年記念出



募集句

一路集

地圖 瀧明選

支那兵は地圖を擱げた儘でにげ世界地圖訂正版も間にあはず眞直い鐵道地圖に無理があり市街地圖ゴーストツブにひつかり占領地地圖へ日の丸書き入れる地圖添へて配給のもの頼んで來地圖も又苦勞を語る遺留品父チャンはどのへんらう地圖を開け世界地圖みるくうち古くなら此處等ま行つた除隊の兄の地圖鐵籠屋で開けば地圖より解りい、兩巨頭何をか語り地圖を指す歐洲の地圖一杯にヒットライかんぢんの所で地圖が切れて居り道きけば地圖まで書いて御親切念佛の行ける淨土に地圖はなし建國の滿洲地圖が古びて來話では判らぬ地圖を書いてやりその外は雲でかくした名所地圖地球儀を圍んで僕等五年生血と汗と流して東亞の地圖が出来世界地圖張つて社長の話しすぎ移轉先葉書の地圖に矢がささり幾戦に變るや地圖の百年後作戦の地圖へ尊い汗が落ちる世界地圖先生少し背伸びする(五)電車通も出て地圖を呑込め

詩朗 一 半 正 路 若 眞 理 子 小 葉 和 坊 不 二 牛 步 翠 芳 美 奈 都 快 哉 千 斗 彌 生 抱 逸 平 人 吐 空 帆 船 同 美 奈 子 同 鷄 城

(五)此邊で負傷したすと地圖を指し
(五)世界地圖平和な時のままかから
(五)交番所受持だけの地圖でよし
(五)野原にも町名がある市内地圖
(人)聖戰の廣さを地圖で教へられ
註 日本國防又は事變戦局は滿洲、中支南支のあの廣大な地域を更らに佛印、泰國にも及ぼんとしてゐる、只一口に戰地といふが地圖を開いて見て初めて戰局の廣さを知り皇軍將士の勞苦を察知するのである。
(地)地圖の海蝸と蜘蛛が跳越る 千斗
註 太平洋といひ大西洋といひ、その大海原は或は怒濤を起し或は艦船を呑み、渺茫何百方里の海洋も地圖の上では纏取クモも一と飛びである。
(天)地圖で見る大日本の好い形 香林坊
註 北から南へ手を擱げたやうな日本の島影は例令少なりと雖亞細亞大陸を抱くが如く或は護るが如く正に東亞の盟主にして嚴然たる姿である我々大和民族にはこの島姿こそ尊崇其ものであらねばならぬ。
孝行の道も獨立して判り獨立へ苦面して來た酒を呉れ獨立へまだまだ若い意見訊く雜草の一つ一つに花盛り獨立の蔭にかくれた血の努力獨立の日の生計を妻とする獨立へ大使の握手痛い程獨立をしてみて親の有難味獨立宣言歴史は一つの輪廻です獨立へ負けてはならぬ共稼ぎ獨立の後姿は父に似て
壽堂 詩朗 十四之 彌生 翠芳 駒志希 初舟 八重 眞理子 武士 治男

獨立 民郎選

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社十月例会

十月四日

於 御津八幡宮

出席者(順不同)

路郎、石鹿、鷹丸、斗風、三司、吐空、
緑葉、鮎美、一鉢、平行、不二、雅美、
和坊、晴美、緑雨、美奈子、紅多呂、丹
路、無煙、巨人、八九滿、正一期、富士
子紋、千斗、翠光、恒明、文雄、春巢、
葉、夜王、緑風、健作、珍之介、九一、
紫香、籬彦、一笑、鷓聲、滿潮、呆人、
潮花、萬的、帆船、霞乃、凡生、アト

席題「娘」

互選

吊皮へ娘としての袖を上げ
内氣な娘へお茶が冷えてゐる
連が来てから娘さんよく喋り
お轉婆に琴を習はず話が出る
秋の雲娘は窓によつたま、
友達やうに母親呼ぶ娘
一周忌娘盛りを惜しまれる
公園の暗さを娘斜に抜け

席題「電報」

八九滿選

父歸還子に電報を讀ませて見
電報の聲二三軒起すなり
電報と聞いて茶碗を一つ割り

席題「電報」

八九滿選

和坊 舊家から舊家へ嫁ぐ荷を飾り
巨人 舊家の屋根の草抜く人もなし
翠光 舊家として時局の波は争へず

お向ひへ来た電報が氣にかゝり
土砂降りの中へ電報打ちに出る
父が来る電報が来た二階借り
公電へすでに覺悟のあつた妻
電報を帯に深夜の風を受け
電報へ結局一人旅に立ち
電文を讀んで淋しきマツチの火
来る時が来た電報握りしめ
電報を受けにみんなが立つて来る
電報の時間と違ふ船が着き
電報へ犬も不安な顔をあげ
友情に泣く電報となつた夜
人情はフト電報をうらがへし
電報の聲に赤兒も目を覺し

席題「舊家」

丹路選

柿一つ舊家の庭に熟れ残り
ちんまりと祠が隅にある舊家
峠から舊家の屋根がひかるなり
折目正しく半紙を包むのも舊家
舊家に生れ牛乳をよう飲まず
舊家まだ番頭丈で持ちつゞけ
舊家から舊家へ嫁ぐ荷を飾り
舊家の屋根の草抜く人もなし
舊家として時局の波は争へず

席題「博士」

春巢選

博士にも子が無く犬と猫が居る
不治だとはつきり博士言はぬなり
病める身は博士の眉を見逃さず

席題「博士」

春巢選

博士にも子が無く犬と猫が居る
不治だとはつきり博士言はぬなり
病める身は博士の眉を見逃さず

口癖は槍一筋の御家柄
門錠が錆びついてゐる舊家
い、井戸を持つて舊家の門構へ
訪へば大玄關に槍をかけ
舊家もう懸崖の菊咲き初め
欄間から鼠がのぞく舊家の灯
集金に来て舊家だと思ひ
勝手口だけで舊家は出入する
舊家へ来る人だ袴をはいてみた
何をして食ふかと舊家うたがはれ
度びの晝を舊家のあけはなし
ダイナミックスピーカーがある舊家
鳥籠へ舊家は音をたてゐる

催促の歸りは月が美しい
催促の聲を隣に聞かずまい
喫茶の灯娘に催促をされるなり
催促は花緒の切れたことも云ひ
さつぱい催促高下駄で下る
手をかへた催促女がやつて来る
催促のきれいな色にして歸り
催促へ座布団もなく待たされる
舊友にする催促が淋みしい日
すし買うて催促に行くあほらしさ
催促を妻に云はれて手紙書く
催促をされて妓は膝を立て
くせみんを出して催促して歸り
催促は昨日と同じ事を云ひ
催促の垢も三十六度二分
催促の羊羹色にはけてゐる

科學する子供に博士へこまされ
看板に博士と書いて小さく住み
常識を超えた逸話をもつ博士
専門ぢやないかと博士ひるくにげ
孝心へ博士ほんと言ひしぶり
博士たるものなぐられた脳病院
町會の乞へば博士は裸で出
急診を乞へば博士は裸で出
薬品の効能へ博士名を連ね
世渡りの術にも博士くらからず
先代と同じ偉でくる博士
博士もう萬策つきた脈をとり
ドイツ語で博士とん服包ませる
OBの野球博士が一人くる
手術着の白さへ博士年をとり
解剖を遺言にして博士逝き
酒少し許す博士もいける口

轉業をしても屋號で呼ばれてゐ
賣切れてしまへば屋號淋しから
なつかしい屋號見つけた慰問品
屋號をば二つに割つて顔を出し
轉業の屋號多難な明日おもふ
島の内屋號を残り遊んで居
統制へ屋號に副はぬ物も賣り
學校も屋號で通る若旦那
旅の空同じ屋號の家を見る
屋號とは別に未生流指南
この屋號はずし明日からナツバ服
なつかしさ屋號で高く賣れた頃
洗濯屋白い屋號をつけておき
屋號には似合はぬ顔の周旋屋
殺された役者へ棧敷からの聲
屋號だけ傳へもうかりもせぬらしい
この秋を屋號にすまぬものを賣り

恒明 香林坊 石鹿 恒明
石鹿 恒明 香林坊 石鹿
恒明 香林坊 石鹿 恒明
石鹿 恒明 香林坊 石鹿
恒明 香林坊 石鹿 恒明
石鹿 恒明 香林坊 石鹿

恒明 香林坊 石鹿 恒明
石鹿 恒明 香林坊 石鹿
恒明 香林坊 石鹿 恒明
石鹿 恒明 香林坊 石鹿
恒明 香林坊 石鹿 恒明
石鹿 恒明 香林坊 石鹿

軒下の店にも屋敷有りは有り
紀之國屋郷土のよしみだ宿るなり
一流の屋敷場末で見つけたり
三代目屋敷を捨てた株を持ち
落ちてきて屋敷で呼ばれたとする
商賣の判る手軽な屋敷なり

川 松山支部句會 (松山)

十月四日

耕一路報

船と思へぬ疊あり障子あり
疊だけ出してあつさり大掃除
青疊婚禮を待ち春を待ち
蟻の眼に萬波をなした疊の目
わが家の疊へ旅の疲れが出
丸葉の氣儘疊の目が制止
聖壇で疊の夢をなつかしみ
組長の或日は過去の胸を見せ
引受けた名組長の尻からけ
組長の指導宜しき隣保愛
や、こいといこは組長讀んでおき
組長の不言實行記事にあり
宵宮のきらめく星もありがたし
遺家族へ今日組長の襟正す
宵宮の灯が美しい旅の宿
宵祭り振袖の子を差し上げる
常會へ組長一人東向き

川 松江支部句會 (松江)

九月十一日 於馬背福惠亭 山川兒報

未教育點呼豫習に豆が出来
日本刀砥石にだけはさからはず
未教育銃の重みに耐へられず
未教育戰陣訓を暗誦し
晩酌も新體制の型に酔ひ
もう酒は止めたは昨日の日記帳
酒斷つた目に花ざかり花ざかり

紅立つてちよこなんとある嫁が島
國民學校訓導にしてナイフ砥ぎ
未教育こんなところで又笑ひ
たまさかに酒あり疲れのほぐる、よ
秋風に砥石は畦で忙がしい
突撃精神あつて頼母し未教育

川 廣島支部句會 (廣島)

九月二十四日 於大竹屋 久米雄報

刑事室見覚えのある顔にされ
小走りで残した話足しに來る
生甲斐があつたと母の眼がうるみ
商用の時間半端に残つてる
見覚えがあらう鋭い視線なり
繪葉書へたしか商用だつた苦
紙芝居小走りで來る子を數へ
商用に來た日を土地の秋祭
小走りでお忘れ物の聲が追ひ
小走りは驛の時計へ來て止り
生甲斐は孫曾孫に取り巻かれ

川 簸川支部句會 (鳥根縣)

十月二日夜 於 八雲居 綠之助報

大陸も隣組なる色となる
隣組みんな揃つて至極無事
禁酒した記念日獻金の窓に立ち
隣組いつそ此の壁取りませう
招かれて節酒の誓ひふと破れ
實力を持った男が隅に居る
隣組の餘力がみのる芋畑
記念日の大日章旗朝の風
鼠一匹暴風雨の中をつツぱしり
記念する日か思ひ出はほるにがし
暴風雨辨當と無事に戻つて來
子の口に熱い乳房だ暴風雨

覺悟した女房とある不甲斐なき
虹が出て照々坊主禮をする
虹が出たあたり一面子の世界
水害もけるり忘れた朝の虹
虹へ首出して二階は素ツ裸
虹の色子供は一つ名が知れず
背の子を持てあましてるかくれんぼ
かくれんぼ廣いお家だと思ひ
子を賣うた娘がまたも鬼になり
かくれんぼ勝つて出た子のよこて居
捕れそうな蟬が鳴いてるかくれんぼ
かくれんぼ梅の熟れたのを見付け
かくれんぼ銀杏の實を拾つて來
複雑な家庭になつてしわがふえ

川 下關支部句會 (下關)

九月十六日 於 市多樓居 半休報

散髪のとつりが要らない男前
賣店のあかりを消した終列車
賣店へ子供を思ふ足が向き
田舎道舊家に白うい壁のあり
男前九官鳥へ向き直り
男前道頓堀の灯にも飽き
田舎道病氣な低した草があり
田舎道道一ぱいに子は戻り
田舎道郵便さんと又出合ひ

川 尼崎支部句會 (尼崎)

九月二十八日 於昭和莊 美知夫報

無駄排除出來た豫算はどの通り
一發の彈丸も無駄には射たぬ兵
標語等知らぬ女中に無駄もなく
延ばされし釘それの部署に
まだこんな無駄な餘白があるノート
廢物を生かし屑屋は儲ける氣
空襲も知らず聖職こ、五年
下駄履きの國民服も強い國
決斷に富んだヒットラ勝ちつゞけ
國強し國債直ぐに賣り盡し
一錢の貯蓄に國を築き上げ
圖に乗つてあたりちららしてゐるナチス

抽斗の中はキンシの殻ばかり
過然にあけた抽斗遺書と知る
抽斗の裏の役目は將棋盤
嫌で來る支那兵やはり負けてゆき
支那兵の祖國へ恥ぬ捕虜で生き
支那兵の夢は東京攻めてゐる

川 早鐘句會 (大牟田)

九月十二日

船酔ひへあちらは軍歌唱つてる
船客に潜水艦が出る噂
水洩か故障か船客騒ぎ出し
船酔ひへ母のまぢない効いたらし
上陸の聲に船酔ひ何處へやら
船客は十年振りに見る祖國
船客が世界のニュース持つてくる
船酔ひへそれ洗面器ハンカチフ
漁船の客となつたる良い日和
船客へもう着きますと擴聲器
植木など止めて島に趣味を換へ
「無駄ナシ」へ止めて言へ酒煙草
抗戰の無駄を教へて官撫班
無駄排除出來た豫算はどの通り
一發の彈丸も無駄には射たぬ兵
標語等知らぬ女中に無駄もなく
延ばされし釘それの部署に
まだこんな無駄な餘白があるノート
廢物を生かし屑屋は儲ける氣
空襲も知らず聖職こ、五年
下駄履きの國民服も強い國
決斷に富んだヒットラ勝ちつゞけ
國強し國債直ぐに賣り盡し
一錢の貯蓄に國を築き上げ
圖に乗つてあたりちららしてゐるナチス

川 四ツ橋支部句會 (大阪)

九月十二日

慰問袋早く返事が欲しいなり
かほる



妻夫幹主郎路 るあつし踐實をけ歩け歩にへ調地行吟
一影撮生凡てに山奥日春・良奈一

柳 展 望 界

催

▼本社十月例会は四日午後六時柳津八幡宮で開催▼松坂俱樂部麻生路郎川柳講座(十月五日・九日(野外行)・廿六日午後一時)▼有恒俱樂部川柳講座(十月八日・廿二日午後五時)▼阪大川柳會(十月二十四日午後四時)▼警察病院川柳會(十月廿八日午後五時)以上何れも

消 息

開かれた大阪より岡田某人氏出席
▼中内翠芳氏(不朽洞會員)は九月末頃より急性肺炎で病臥されてゐたが経過良好の由全快を祈る。▼道廣世紀彦氏(不朽洞會員)は九月十六日顔面及び後頭部に負傷、右肩の骨折災厄に遭はれ、即日行岡病院に入院されたが、十月十六日一ヶ月振りで退院経過は良好のよしである。▼在布哇古川風竹氏(不朽洞會員)は神經痛で自宅療養中であったが九月十日より馬哇島にて静養されてゐる。▼杉原大研子氏(不朽洞會員)は十月十一日秋

路郎主幹
▼下關支部十月例会は十日夜多田市多樓氏宅に於いて催された

▼阪神電鐵産報文會十月例会は十日午後六時西宮産報會館で開催。▼川維岡山支部で創立一周年記念句會を十月四日禁酒會館に於いて

燃ゆる美観・天龍映を探られ、更に能代秋田へと足を延ばされた由
▼奥村丹路氏(不朽洞會員)は九月廿一日芽出度く二女美穂子さんを儲けられた。▼戸田孤篁氏(不朽洞會員)の嚴父越舟氏はかねて病氣御療養の處、九月二十七日午前六時永眠された。法名は釋和順。謹しみて悼む。▼須崎豆秋氏(不朽洞會員)の御令弟長谷川三汀氏は九月二十九日逝去された。三汀氏は永い間の病中日記をすべて七音字で終始し川柳即宗教の信念で闘病、病苦は少しも訴へられず全く川柳の大往生を遂げられた。危篤の病床で實兄豆秋氏におくつた最後の川柳は「遠く來し兄へやつとのしやがれ聲」謹みて御冥福を祈る。▼西野みづほ氏(廣島)は永らく誌上にその異彩を放つて居られました。去る九月廿五日八年間の闘病生活空しく他界された。遺句は「八年前すでに覺悟はしてゐたが」みづほ。謹みてお悔み申上ます。▼坂口芳一氏(阪大川柳會)は十月十七日逝去、二十二日午後三時から長柄新齋場に於て佛式で盛大な葬儀が執行された。謹悼。

慶 弔

▼石浦實一氏(大阪府泉北郡高石町羽衣三十二番地へ)
▼田中部之介氏は將薨に。
社の廻覽板
▼川雜御池橋支部幹事更迭。舊幹事西いわを氏に替つて、村松夢裡氏が新しく幹事に就任された。

▼後藤青兒氏西いわを氏北山梧郎氏は何れも家事の都合により不朽洞を退會された。再起の一日も早からんことを祈る。

後 記

▼防空はもう演習ではない。いよいよ來たなといふ、さし追つて氣持でやつてゐた。これに敵機襲來に對する心構が、すつかり出來てしまつた。
▼東條新内閣が誕生した。首相が兼内相であり、兼陸相である。これなら電撃的に動ける。英米がタチヂとするのも無理はない。國民の肚はとうの昔に出來てゐる。右顧左眈してゐるは東亞の共榮も赤瓜もあつたものでは無い。躍進以外に策なしだ
▼休閑地の俄百姓は目にあまるが、休閑地が休閑地でなくなりつゝある現象を見ることは愉快である。日本のやうな島國でだだつびろい土地をムダに遊ばしておくなんざア勿體ない話だ。捨てといつて、値上りを待つやうなしみつたれ根性が、この際清算されるだけでも愉快でたまらない。
▼紙が問題になる時代に講讀者が激増する。世の中は何處までも皮肉に出來てゐる。思ひ切つて前號から大増刷を敢行した。太く短くといふ譯ではないが徒らに悲鳴をあげてゐるのが能ではない。「燈下放談」は丹路・

豆秋・某人・夜王と私とで喋べつた。十月十一日の夜のことである。會場は南船場の山本邸である。▼拙稿の「銃後名句評釋」は句を選むのに、多くの時間を消した。同じ銃後の句でも事情も違ひ、感じ方も違つてゐるので句を選び出すのに非常にやんだ。この句は面白いと思つても現在の氣勢がその句の境地を評釋し得ないものもあつた。▼石曾根氏郎氏の「國語卷七の川柳點に就いて」は信州日日に連載されたものであるが、川柳人に殆んど讀まれてゐないのに、筆者の諒解の下に轉載することにした。▼本號の表紙は福井哲氏を煩はした。空の護りし川柳寫眞である。句は大西八歩氏の作。(路郎生)

大阪 名物 松前 布昆
本舖 齋藤前
公前屋
電話南(八二〇)番
出張店 朝日丸 專門大店
電話北(五〇)番

事 幹 と 部 支

道頓堀支部(大阪)萬よし
函館支部(函館)展修
梅田支部(大阪)結美
箕川支部(鳥根)綠之助
鳥取支部(鳥取)鐵州
松山支部(松山)耕一路
天王寺支部(大阪)八九滿
鶴町支部(大阪)双虎
御池橋支部(大阪)夢裡
松江支部(松江)山川兒
大鐵局支部(大阪)柳太

西條支部(愛媛)英賀夫
城南支部(大阪)申仙
今治支部(今治)文庫
難光笑會(大阪)里十九
竹原支部(廣島)芳郎
廣島支部(廣島)久米雄
豐中支部(豐中)紫香
下關支部(下關)半休
北鮮支部(羅津府)美笑
蒙疆支部(張家口)柳路
上海支部(中華)天作

鐵道病院支部(大阪)春巢
瀨支部(大阪)みのる
四ツ橋支部(大阪)翠芳
布哇支部(布哇)寛花麗
堺支部(堺)角堂
岡山支部(岡山)九坡
尼崎支部(尼崎)美知夫
日和佐支部(德島縣)賢次
川早鐘會(大牟田)蝶人
小郡支部(山口縣)井蛙

主幹 麻生路郎
贊助員 池澤樂居 長谷川一徹 大田弘雄 岡本一平 片岡直方 笠原純生 嘉納純二 田中辰秀 長岡牛太郎 長野晴演 藤本卯之助 藤原退藏 淺田一藏 末弘巖太郎

谷脇素文 高尾亮雄 生方敏郎 窪田銀波樓 山本雨迷 安川久留美 前田五健 柴谷幸二郎 篠原二郎 蛭子省二 藤里好古 森東魚

不朽洞會員 橋本綠雨 高橋かほる 福田山雨樓 西田艸樂 永田里十九 奧村丹路 岩崎柳路 寺崎柳路 大西八歩 高澤一浪 戸田孤鐘 石井白面人 川出美根子 中島生々庵 戸倉普天

小畑自有浪 古川風竹 前山北海 古川麗花 岩崎山石 藤本貴志子 米本貴志子 三輪草一郎 内藤草一郎 水谷鮎美 大坂形水 田中雨月 平佐平三 橋本波夢造 藤岡至藝瑠 西川青美

丸尾潮花 岩橋双虎 岡田某人 岡崎松代 岩井斗風 北川筑巢 布林橙舍 小崎方正 尾崎香附子 佐竹香附子 押谷たけを 關根山彦 西尾一 多田不波 櫻田久米雄 中風葉人 田原鏡人 濱田久米雄 濱田久米雄 好崎申仙 杉原大研子 菊深小松園 魚住滿潮 岩本雀踊子 清水友帆 石野秀雄 清水史路 清水白柳子 中西翠水

多田市多樓 濱田賢次 森宗男 大森風來子 鈴木九坡 逸見灯竿 石原伯峯 植山一笑 夷木石鹿 鈴邊曉童 矢野赫堂 月原青明 高田抱逸 篠山牛彦 國弘牛彦 道廣世紀彦 岩崎水虹 岩崎勇記 阿萬萬的 谷川綠風 小井文月 酒井美知夫 飯尾寄典史 小川恒明 野口柳太 津路玲之介 河野夜王

募 集

第十九卷 第一號課題
十一月廿日締切
(十句以内)

沿 線 旗
麻生路郎選
橋本綠雨選

第十九卷 第二號課題
十二月廿日締切
(十句以内)

雪 空 岡田某人選
軍 事 便 高柳柳兒選

第十九卷 第三號課題
一月廿日締切
(十句以内)

戰 鬪 帽 市場沒食子選
腕 河野夜王選

每號募集 (每月五日締切)

近作柳樽(廿句) 麻生路郎選
川柳塔 麻生路郎選

同舟近詠 (會報)
各地柳壇 (會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定

投稿は本社發賣の投句用箋、官製

葉書又は同型の原稿紙に各種各題

必ず別紙に認め、住所氏名雅號を

明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雅吟を募る

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事。

規格別B列5號
川柳雜誌 第十八卷 第十一號
毎月一回一日發行

定價
一冊 金三〇錢
半ヶ年六冊 金一四八錢
一ヶ年十二冊 金三〇六錢
送料別
外國送料には海外郵送料實費の加算を乞ふ
御注文はすべて前金で願ひます。振替(大阪五〇五)又は小振替を御利用願ひます。御注文は何時より御指示願ひます。轉居又は改號等の際は舊新併記の事。

昭和十六年十月廿五日印刷
昭和十六年十一月一日發行

禁斷轉載 本誌の刊行は有保
證新聞紙法に據る

本誌廣告に御用の節は川柳
雜誌社廣告部へ御一報下さ
いますやう。

發行所 **川柳雜誌社**
大阪市西區江戶堀上通二丁目四番地
電話 三三三三番
振替(大阪七五〇五) 八六四番
電話土佐堀 八三三番
電話後發 一六四番
行印納入 麻生 幸二 郎
東京市神田區區濱路町一丁目九番地

協化文版出本日
會協化文版出本日
會協化文版出本日

送住 本所 者名

アサヒビール

大日本麦酒株式会社

含有滋味が
もたらす
元氣

愛飲家に
確認さる

ガラス壘代用

紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・
組立式各種・薬品・食
料品・菓子等の容器と
して最適



大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番
工場用 同 五八〇三番
五八〇四番

あ産
のた
めに

片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

推獎
片瀬醫學博士 監査
梅林醫學博士



ブダカルシウム錠

大坂道修町 和田卯助商店

髪之美は
げに日本の姿なり



フケ・カユミを止め白髪・若禿
を防ぎ明朗な青年美を創る

伊豆椿香油本舗

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳園



SENRYU ZASSHI

No. 214

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

りとびきに

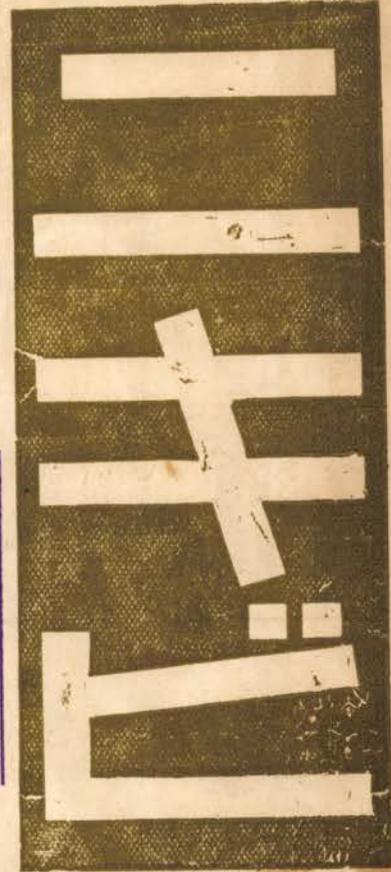
美
顔
水

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、
殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重
寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので
大評判の薬です。ニキビや吹出物でお
困りの方に大きな喜びの糧!
お勸したい薬です!

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時!



| | | |
|---|---|---|
| 是 | 吹 | ニ |
| 非 | 出 | キ |
| 此 | 物 | ビ |
| 藥 | に | . |

阪大・京東
館天順谷桃